

朝日宮ノ原遺跡 谷ノ久保遺跡

2012年

日田市教育委員会



宮原台地全景（東から）

台地右端が朝日宮ノ原遺跡 D 区

左端が朝日宮ノ原遺跡 E 区



朝日宮ノ原遺跡 D 区（南から）



朝日宮ノ原遺跡 D 区全景

序 文

本報告書は、当教育委員会が過去に発掘調査を実施しました朝日宮ノ原遺跡D・E区と谷ノ久保遺跡の調査内容をまとめたものです。この2つの遺跡は、朝日宮ノ原遺跡が宮原台地、谷ノ久保遺跡が山田原台地に位置していて、近接する遺跡でもあります。

こうした遺跡のある周辺には、国史跡の小迫辻原遺跡や、大分県史跡である吹上遺跡と朝日天神山古墳が存在しており、市内でも貴重な古代遺跡が残っています。とくに、弥生時代の遺跡が密集している地域として重要な場所でもあり、両遺跡からは、弥生時代を中心とする墳墓などが発見されています。

この報告書が、文化財の保護はもちろんのこと、今後の日田市の弥生時代を解明していくための資料としての活用が望まれるところであります。また、地域の歴史や、児童生徒の社会教材資料などに寄与できれば幸いです。

最後に、調査から整理・報告書作成にいたるまで、ご指導、ご協力を賜りました多くの関係者の皆様方に対し、心より厚くお礼を申し上げます。

平成24年3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

例　　言

1. 本書は、日田市教育委員会が国庫補助事業を得て実施した、下記遺跡の発掘調査報告書である。
朝日宮ノ原遺跡D区（昭和63年度）
谷ノ久保遺跡（平成6年度）
朝日宮ノ原遺跡E区（平成13年度）
2. これらの調査は、当時は日田地区遺跡群発掘調査事業として実施したもので、現在の市内遺跡群発掘調査事業にあたる。
3. 各遺跡の発掘調査にあたっては、大分県、中津市、宇佐市の各教育委員会職員や各遺跡の土地所有者のご協力を得た。
4. 各遺跡の調査現場での実測・写真撮影は、調査担当者が行った。
5. 本書に使用した遺構図の方位は、全て磁北である。
6. 本書に掲載の遺物実測図は、雅企画有限公司に委託した成果品を使用したほかは渡邊が作成した。
7. 製図は日田市臨時職員および上原の協力のもと渡邊が行った。
8. 遺物写真は、雅企画有限公司に撮影委託した成果品を使用したほかは若杉が撮影した。
9. レントゲン写真は大分県立博物館の協力による。
10. 朝日宮ノ原遺跡D区の空中写真は、有限会社空中写真稻富に委託した成果品を掲載している。
11. 卷頭の空中写真は株式会社九州航空に委託した成果品を使用している。
12. 写真図版中の番号は、全て挿図番号と一致する。
13. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
14. 朝日宮ノ原遺跡E区の人骨調査、鑑定は、田中良之（九州大学教授）氏に依頼し、玉稿を賜った。
15. 本書の執筆分担は、以下の通りである。
第1章 土居和幸・渡邊隆行
第2章 渡邊隆行
第3章 土居和幸
第4章 土居和幸
第5章 渡邊隆行・舟橋京子・谷澤アリ・米元史織・高椋浩史・李ハヤン・田中良之
第6章 土居和幸・渡邊隆行
16. 本書の編集は、渡邊の協力のもと、土居が行なった。



日田市の位置

本文目次

第1章 調査に至る経過と組織

(1) 調査に至るまでの経過と発掘調査	1
(2) 調査組織	2

第2章 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境	4
(2) 歴史的環境	4
(3) 朝日宮ノ原遺跡周辺の調査履歴	8

第3章 朝日宮ノ原遺跡D区の調査

(1) 調査の内容	9
(2) 遺構と遺物	9
(3) 小結	33

第4章 谷ノ久保遺跡の調査

(1) 調査の内容	35
(2) 遺構と遺物	35
(3) 小結	38

第5章 朝日宮ノ原遺跡E区の調査

(1) 調査の内容	39
(2) 遺構と遺物	39
(3) 貴棺出土人骨について	45
(4) 小結	46

第6章 総括

挿 図 目 次

第 1 図	弥生時代遺跡分布図 (1/60,000) ······	5	第 39 図	土坑実測図 (1/40) ······	31
第 2 図	調査区位置図 (1/15,000) ······	7	第 40 図	その他の出土遺物実測図 (1/2、1/4) ······	32
朝日宮ノ原遺跡 D 区			第 41 図	墳墓群配置図 (1/300) ······	33
第 3 図	朝日宮ノ原遺跡 D 区調査区位置図 (1/5,000) ······	9	谷ノ久保遺跡		
第 4 図	朝日宮ノ原遺跡 D 区遺構配置図 (1/200) ······	10	第 42 図	谷ノ久保遺跡調査区位置図 (1/4,000) ······	35
第 5 図	1号墓実測図 (1/30) ······	13	第 43 図	谷ノ久保遺跡遺構配置図 (1/200) ······	36
第 6 図	1号墓櫛棺実測図 (1/8) ······	13	第 44 図	建物・土坑実測図 (1/60) ······	37
第 7 図	39号墓実測図 (1/30) ······	13	第 45 図	出土遺物実測図 (1/3) ······	38
第 8 図	39号墓櫛棺実測図 (1/8) ······	13	朝日宮ノ原遺跡 E 区		
第 9 図	39号墓出土鉄器実測図 (1/2) ······	13	第 46 図	朝日宮ノ原遺跡 E 区調査区配置図 (1/5,000) ······	39
第 10 図	3号墓実測図 (1/30) ······	14	第 47 図	E 区全体図 (1/100) ······	39
第 11 図	23号墓実測図 (1/30) ······	14	第 48 図	1号櫛棺墓実測図 (1/30) ······	40
第 12 図	26号墓実測図 (1/30) ······	15	第 49 図	1号櫛棺実測図 (1/8) ······	40
第 13 図	36号墓実測図 (1/30) ······	15	第 50 図	1号石棺墓実測図 (1/30) ······	41
第 14 図	2号墓実測図 (1/30) ······	16	第 51 図	1号木棺墓実測図 (1/30) ······	42
第 15 図	6号墓実測図 (1/30) ······	17	第 52 図	2号木棺墓実測図 (1/30) ······	42
第 16 図	7号墓実測図 (1/30) ······	18	第 53 図	1号土坑墓実測図 (1/30) ······	44
第 17 図	9号墓実測図 (1/30) ······	19	第 54 図	2号土坑墓実測図 (1/30) ······	44
第 18 図	10号墓実測図 (1/30) ······	20	第 55 図	1号土坑実測図 (1/40) ······	44
第 19 図	11号墓実測図 (1/30) ······	20	第 56 図	2号土坑実測図 (1/40) ······	44
第 20 図	12号墓実測図 (1/30) ······	21	第 57 図	土坑出土遺物実測図 (1/4) ······	44
第 21 図	13号墓実測図 (1/30) ······	21	第 58 図	その他の遺物実測図 (2/3、1/4) ······	44
第 22 図	14号墓実測図 (1/30) ······	22			
第 23 図	16号墓出土鉄器実測図 (1/2) ······	22			
第 24 図	15号墓実測図 (1/30) ······	23			
第 25 図	16号墓実測図 (1/30) ······	23			
第 26 図	19号墓実測図 (1/30) ······	24			
第 27 図	20号墓実測図 (1/30) ······	24			
第 28 図	21号墓実測図 (1/30) ······	25			
第 29 図	25号墓実測図 (1/30) ······	25			
第 30 図	27号墓実測図 (1/30) ······	26			
第 31 図	35号墓実測図 (1/30) ······	26			
第 32 図	37号墓実測図 (1/30) ······	27			
第 33 図	38号墓実測図 (1/30) ······	27			
第 34 図	4号墓実測図 (1/30) ······	28			
第 35 図	8号墓実測図 (1/30) ······	28			
第 36 図	17号墓実測図 (1/30) ······	29			
第 37 図	22号墓実測図 (1/30) ······	29			
第 38 図	34号墓実測図 (1/30) ······	30			

写 真 図 版 目 次

朝日宮ノ原遺跡 D 区	
写真図版 1 ①調査区空撮 (1)	③14号墓
②調査区空撮 (2)	④15号墓
③調査区空撮 (3)	⑤16号墓
④調査区空撮 (4)	⑥16号墓
⑤調査区空撮 (5)	写真図版 7 ①16号墓副葬品
⑥調査区の遺構検出状況 (西から)	②19号墓
⑦調査区遺構検出状況 (南から)	③20号墓
⑧調査区遺構検出状況 (北から)	④21号墓
写真図版 2 ①6 ~ 9号墓検出状況 (西から)	⑤25号墓
②6 ~ 9号墓 (西から)	⑥27号墓
③19 ~ 22号墓 (東から)	写真図版 8 ①37・38号墓
④発掘状況 (南から)	②4号墓
⑤発掘状況 (西から)	③37・38号墓
⑥発掘状況 (東から)	④4号墓
⑦発掘調査風景	⑤8号墓
⑧調査参加者	⑥17号墓
写真図版 3 ①1号墓	写真図版 9 ①22号墓
②1号墓	②1号溝
③1号墓	③2号溝
④1号墓発掘写真	④18号土坑
⑤39号墓	⑤24号土坑
⑥39号墓	⑥29号土坑
⑦39号墓	⑦30号土坑
⑧39号墓副葬品	⑧31号土坑
写真図版 4 ①3号墓	写真図版 10 ①1号甕棺
②23号墓	②39号甕棺 (下甕)
③26号墓	③39号甕棺 (上甕)
④36号墓	④39号底部の甕
⑤36号墓	⑤甕 (一括品)
⑥2号墓	⑥袋状鉄斧 (39号墓)
写真図版 5 ①6号墓	⑦素環頭刀子 (16号墓)
②6号墓	
③7号墓	
④9号墓	
⑤10号墓	
⑥11号墓	
写真図版 6 ①12・13号墓	
②14号墓	

写 真 図 版 目 次

谷ノ久保遺跡	表 目 次
写真図版 11 ①調査区全景	第 1 表 朝日宮ノ原遺跡 D 区墳墓計測表 ······ 30
②調査区全景（西から）	第 2 表 朝日宮ノ原遺跡 D 区出土土器観察表 ······ 34
③1 号建物（西から）	第 3 表 朝日宮ノ原遺跡 D 区出土鉄器・石器観察表 ······ 34
④4 号土坑（南から）	第 4 表 谷ノ久保遺跡出土遺物観察表 ······ 38
⑤7 号土坑（南から）	第 5 表 朝日宮ノ原遺跡 E 区出土土器観察表 ······ 46
⑥8 号土坑（東から）	第 6 表 朝日宮ノ原遺跡 E 区出土石器観察表 ······ 46
⑦9 号土坑（北から）	
⑧調査風景	
朝日宮ノ原遺跡 E 区	
写真図版 12 ①調査前風景（北から）	
②1 号甕棺墓完掘状況（北東から）	
③1 号甕棺墓人骨	
④1 号石棺墓蓋石検出状況（南東から）	
⑤1 号石棺墓完掘状況（北西から）	
⑥1 号木棺墓検出状況（南から）	
⑦1 号木棺墓完掘状況	
写真図版 13 ①1 号木棺墓検出状況（北から）	
②1 号木棺墓完掘状況（北から）	
③1 号土坑墓完掘状況（西から）	
④2 号木棺墓完掘状況（南西から）	
⑤1 号土坑完掘状況（南から）	
⑥1 号甕棺墓上甕	
⑦1 号甕棺墓下甕	

本 文 写 真 目 次

写真 1 朝日宮ノ原遺跡 D 区調査風景 ······ 3
写真 2 谷ノ久保遺跡調査風景 ······ 3
写真 3 朝日宮ノ原遺跡 E 区調査風景 ······ 3
写真 4 16 号墓出土鉄器 X 線写真 ······ 22

第1章 調査に至る経過と組織

(1) 調査に至るまでの経過と発掘調査

本書で報告する朝日宮ノ原遺跡D区、同遺跡E区、谷ノ久保遺跡の3遺跡の調査までに至る経緯と各発掘調査の概要は、以下の通りである。

1. 朝日宮ノ原遺跡D区（遺跡の略記号：A M S - D）

この調査の発端は、昭和63年6月22日、日田市土地開発公社から日田市立博物館に朝日宮ノ原遺跡の北側斜面を造成中に赤色顔料が付着した板石が発見されているとの通報に始まる。この連絡を受けて急遽現地へ向かったところ、石棺墓に使用されていたと思われる板石が数枚見受けられた。このため、機械のオペレーターに工事を一時中断してもらい、関係者から詳しい事情を聞くと、山林約800m²を畠地にするための造成工事中であった。

このため、市教委では造成地が周知遺跡である朝日宮ノ原遺跡に該当し、遺構の存在する可能性が高いことから、関係者との遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、工事中止による遺跡の保存は困難であったため、緊急の発掘調査の必要性を説明し、所有者と関係者の理解を得ることができ、発掘調査終了まで工事を待つていただくことになった。また同時に、大分県文化課と協議を行い、調査費については個人による畠地造成によるものであることから、国庫補助事業日田地区遺跡群発掘調査事業（現、市内遺跡群発掘調査事業）費をもって充てることになった。なお、発掘調査は、石棺墓などの墳墓遺構が想定され、人骨が残っていることも考慮して、6月27日から開始した。遺跡所在地は、日田市大字小迫山田119番地である。

発掘調査は、機械を使って表土除去を行ながら、遺構検出作業を進めた。初日には彫柄墓1基を確認し、翌日の28日には石棺墓や石蓋土壤墓などの遺構が見つかった。7月5日からは各遺構の写真撮影や掘り下げ、墳墓内の土砂の篰い作業などを実施し、7日から遺構の測量を開始した。13日には遺構の掘り下げも半分近く完了し、地形測量を行った。8月1日には県文化課後藤宗俊課長補佐（現、別府大学名誉教授）と市内の小学生による現場見学会があり、2日には空中写真撮影を行った。8日からは調査区東側の表土剥ぎを行い、遺構検出や掘り下げ等を進め、11日には全ての作業を完了した。

2. 谷ノ久保遺跡（遺跡の略記号：T N K）

調査は、日田市大字三和字坂ノ辻に建設が予定された福祉施設建設に伴い実施した。この施設は、計画では個人経営によるもので、市福祉事務所を経由して申請があった。この申出に対して市教育委員会では、該当地が山田原遺跡に隣接していることから、遺跡の存在する可能性があるため、関係者に埋蔵文化財調査の理解を促した。結果、事前の試掘調査の了解が得られ、事前の調査を実施することになった。

試掘調査は平成6年6月1日に機械を使って建設予定地の5ヶ所にトレンチを設定し行い、土壤数基を確認した。この調査結果を受けて、申請者と埋蔵文化財発掘調査に関する協議を行い、設計変更による現状保存が難しいことから、最終的には発掘調査実施となった。

発掘調査は平成6年7月18日より開始し、機械で表土を除去した後に、遺構検出作業を行い、土壤数基を検出した。7月21日からは個別の遺構の掘り下げを始めた。26日には1号土壤の掘り下げを行い、弥生土器が出土した。その後も、遺構の掘り下げと写真撮影、実測の各作業を進め、7月29日には全作業を終えた。

3. 朝日宮ノ原遺跡E区（遺跡の略記号：A M S - E）

この調査の発端は、平成13年2月に秋吉利彦氏より市教育委員会に日田市大字小迫字十石山ノ上1510-2に

て、畑を耕作中にトラクターの爪が甕棺に引っかかり、内部が空洞で人骨らしいものが見えている旨の通報があったことに端を発する。そこで市の教育委員会で現地を確認したところ、周辺にも墳墓が所在する可能性が想定された。対応について協議し、所有者の了承を得て国庫補助事業にて、甕棺墓を中心に調査することにした。調査は平成13年2月8日から2月16日の間実施した。人力により、平成13年2月8日より表土を除去し、2月12日には遺構の掘り下げを行い、2月13日には甕棺墓の人骨の取上げを完了し、2月16日には周辺測量等を終えて全作業を終了した。

(2) 調査組織

本書で報告する朝日宮ノ原遺跡D区、同遺跡E区、谷ノ久保遺跡の3遺跡の調査と整理・報告書に関係する組織は、以下の通りである。

(朝日宮ノ原遺跡D区)

発掘調査／昭和63年度(1988) ※所属は、当時のままとしている。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 横原芳彦(日田市教育委員会教育長)

調査指導者 賀川光男(別府大学教授)、佐藤興治(大分市歴史資料館長)

調査事務 武石邦男(日田市立博物館長)、小堀サダ子(同事務員)

調査担当 土居和幸(日田市立博物館学芸員)

調査員 林一也・佐藤良二郎(宇佐市教育委員会)、栗焼憲児(中津市教育委員会)

指導・協力 後藤正二、後藤宗俊、渋谷忠章、高橋徹、友岡信彦、行時志郎(大分県教育委員会)

発掘作業員 石井トモ子、石井ヒトミ、岩崎敬子、蒲池カオル、蒲池サチエ、蒲地ヤエ子、田中静香、森山敬一郎

(谷ノ久保遺跡)

発掘調査／平成6年度(1994) ※所属は、当時のままとしている。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊(日田市教育委員会教育長)

調査事務 原田良伸(日田市教育庁文化課長)、財津寅日出(同文化財係課長補佐)

吉田節子(同課主任)

調査担当 土居和幸(文化課主任)

調査員 行時志郎(文化課主事)、松下桂子(同主事補)、森山敬一郎(同嘱託)

発掘作業員 秋吉ミユキ、石井トモ子、黒田ノブ子、石橋尚子、蒲池サチエ

(朝日宮ノ原遺跡E区)

発掘調査／平成13年度 ※所属は、当時のままとしている。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴(日田市教育委員会教育長)

調査指導員 田中良之(九州大学大学院比較社会文化研究科教授)

調査統括 原田俊隆(文化課課長)

調査事務 石井英信(同課長補佐兼文化財係長)、島崎誠司(同主査)、原田恭子(同臨時職員)

調査担当 行時志郎（同主任）

調査員 吉田博嗣（同主任）、若杉竜太（同主事）、渡邊隆行（同主事）

発掘作業員 秋吉利彦、秋吉ミユキ、安心院照雄、安達アサ子、安達義男、蒲池妙子、端野晋平（九州大学学生）

整理・報告書／平成23年度(2011)

整理主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）

整理統括 財津隆之（日田市教育庁文化財保護課課長）

整理事務 井上和泉（同課主査）

報告書作成 土居和幸（同課埋蔵文化財係長）朝日宮ノ原遺跡D地区、谷ノ久保遺跡

渡邊隆行（同課埋蔵文化財主査）朝日宮ノ原遺跡E地区

行時志郎（日田市立博物館副主幹）朝日宮ノ原遺跡E地区

調査員 若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課埋蔵文化財係主査）、上原翔平（同係主事）

臨時職員 石松裕美、大谷伸宏、鍛冶谷節子、黒木千鶴子、川津真由美、武石和美、武内雅宣



写真1 朝日宮ノ原遺跡D区調査風景



写真2 谷ノ久保遺跡調査風景



写真3 朝日宮ノ原遺跡E区調査風景

第2章 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

日田市は、北部九州のほぼ中央、大分県の西端部に位置する。平成17年に1市2町3村（日田市、天瀬町、大山町、前津江村、中津江村、上津江村）が合併して誕生した新日田市は、人口約71,000人、南北48.6km東西24.8km、面積約66,619haという広大な市域を誇り、西は福岡県うきは市や朝倉市、朝倉郡東峰村、八女市、北は福岡県田川郡添田町、大分県中津市、東は玖珠町や熊本県阿蘇郡小国町、南小国町、南は熊本県阿蘇市と菊池市、山鹿市の12市町村と隣接する。

日田市の地形を概観すると、現在の市街地に当たるのが日田盆地中央の標高約75～90mの沖積面で、その周囲には標高約150m前後の阿蘇4火砕流の流出により形成された溶岩台地が段丘上に巡っており、これらの台地は山田原、吹上原などに代表されるように原（はる）と呼ばれている。この台地群の外側には標高約200～600mの耶馬溪火砕流で形成された溶結凝灰岩台地、その周囲には1000m前後の筑紫溶岩に起因される山々がそびえ立っている。盆地内には南から大山川、東から玖珠川、北から花月川が流れ込んで筑後川の上流にあたる三隈川を形成し、盆地中央部の沖積地を形成している。

古代においては筑・肥・豊の3国が境をなし、近世では各種主要幹線道が放射状に伸びるなど、まさに北部九州の交通の要衝であった。このような地形の特性をもつ日田市は、古代～中世では豊後國日田郡、近世には日田藩を経て幕府直轄地となり、江戸中期には西国筋郡代所が置かれ独特の天領文化を生むほどの繁栄を遂げるのである。

さて、今回報告を行う朝日宮ノ原遺跡、谷ノ久保遺跡は、この日田盆地北部の台地上にいずれも位置している。このうち朝日宮ノ原遺跡は、通称宮原と呼ばれる標高120mの台地上に位置し、台地西側の眼下には二串川が流れる沖積地が広がっている。谷ノ久保遺跡は通称山田原台地の北端に位置し、北側に張り出した小丘陵上に位置し、北側の眼下には小さな谷が広がっている。

(2) 歴史的環境

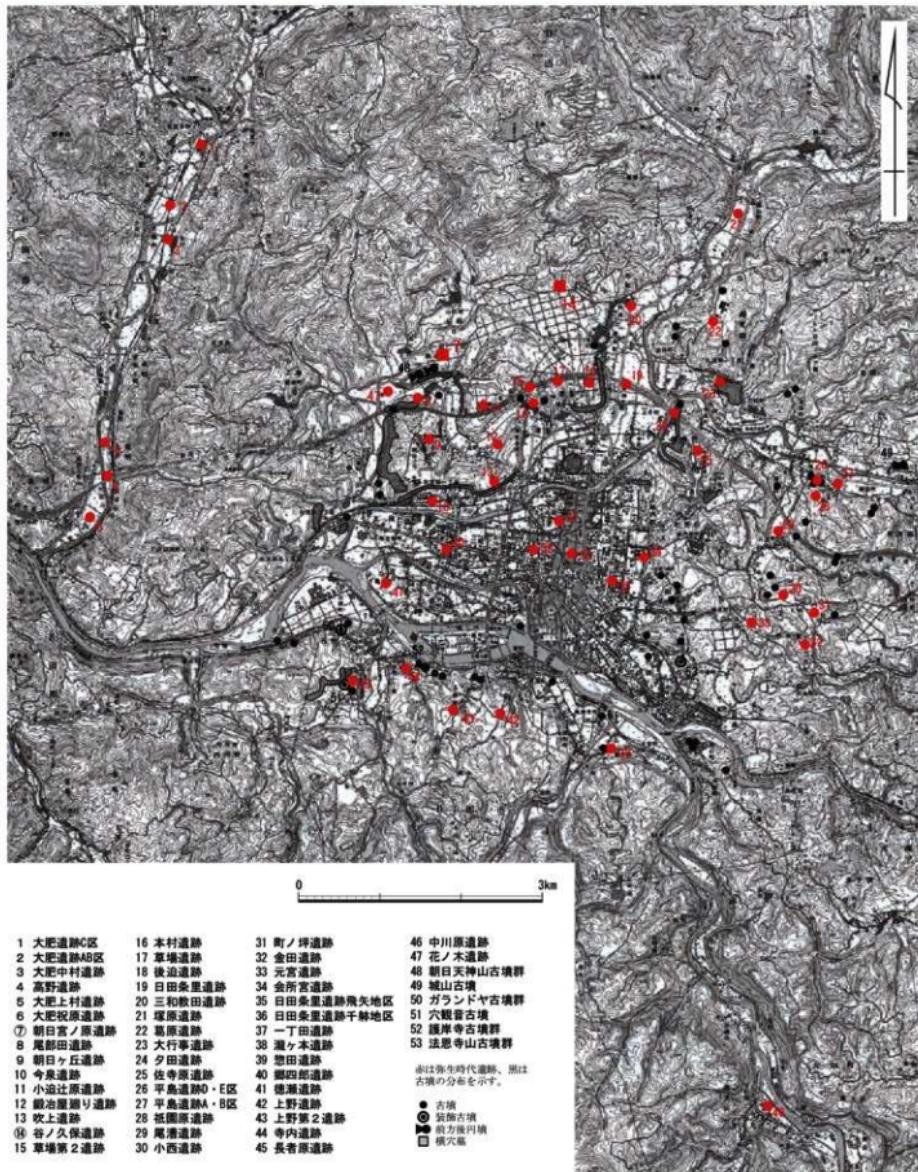
遺跡の立地する山田原台地を中心とする日田盆地北部は市内でも有数の遺跡の密集地帯であり、特に弥生～中世にかけての遺跡が豊富にみられる。さて、ここでは主に、今回報告を行う遺跡の時代に該当する縄文時代から古墳時代を中心として歴史的環境を説明することにする。

旧石器時代

日田市での旧石器時代遺跡の多くは市東部の五馬台地周辺に多くみられ、後期旧石器時代に属している。日田盆地内での確認事例は少ないが、遺跡周辺では葛原遺跡や三和教田遺跡、草場第二遺跡、吹上遺跡などでナイフ形石器や台形石器などが発見されており、少なくとも2万5千年ほど前の遺跡が台地周辺に所在していたことが知られる。

縄文時代

縄文時代になると、五馬台地以外に日田盆地内に遺跡が多くみられるようになる。山田原台地周辺では吹上遺跡などで押形文土器が出土しており、早期の遺跡が台地上に展開していたことが知られている。後期から晩期になると遺跡の数が増え、葛原遺跡では後期後半の竪穴遺構等、三和教田遺跡では後期後半の流路から土偶が出土



第1図 弥生時代遺跡分布図 (1/60,000)

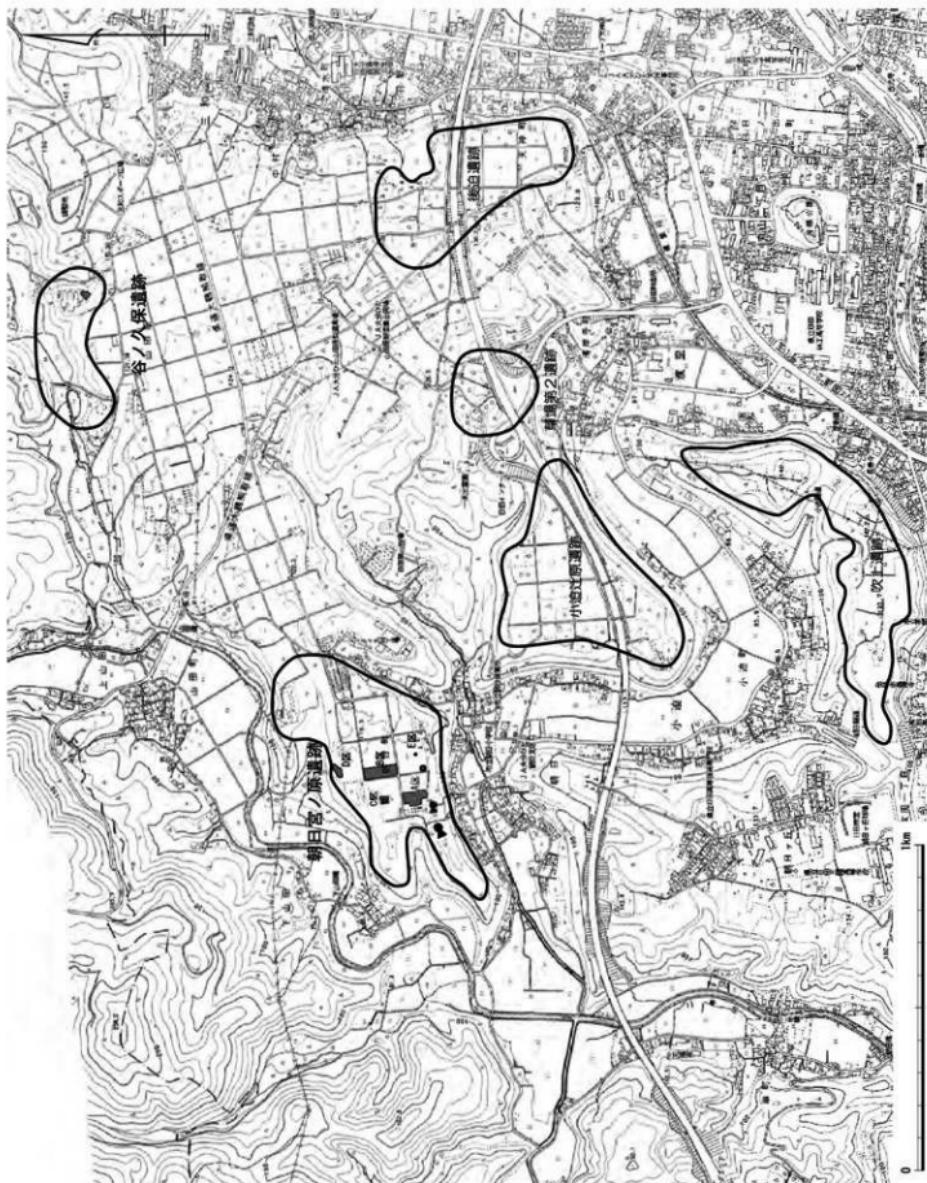
し、尾部田遺跡では後期末～晩期初頭の堅穴建物が確認される。また吹上遺跡では晩期黒川式の土器などが出土しており、遺跡周辺の台地や台地裾部の緩斜面部などに縄文集落が展開していたことは想像に難くない。

弥生時代（第2図、○番号は第2図に該当する。）

弥生時代になると、日田盆地内の遺跡の数は急増し、山田原台地周辺を中心に遺跡が展開するようになる。前期の後半には徳瀬遺跡⁽¹⁾、吹上遺跡⁽²⁾、小追辻原遺跡⁽³⁾などで集落が営まれ日田の弥生社会が産声を上げるが、中期初頭頃には徳瀬遺跡や小追辻原遺跡などの遺跡は一旦その役目を終える。と同時に、山田原台地を中心後に追遺跡⁽⁴⁾や朝日宮ノ原遺跡⁽⁵⁾、盆地東側の佐寺原遺跡⁽⁶⁾、大肥川流域には大肥遺跡⁽⁷⁾といった、吹上遺跡と同じく弥生時代を通じて継続的に利用される拠点的集落が営まれるようになる。さらにこの頃には、短期間のみ利用される葛原遺跡⁽⁸⁾や日田条里遺跡飛矢地区⁽⁹⁾、三和教田遺跡⁽¹⁰⁾、会所宮遺跡⁽¹¹⁾などの小規模集落が造られ廃絶される特徴がある。この傾向は後期前半まで継続しており、この頃には小追辻原遺跡や塚原遺跡⁽¹²⁾などの小規模集落が短期的に営まれる。さて、このように弥生遺跡が展開傾向を示すなか、中期後半以降の山田原台地周辺には、前述の幾つかの拠点的集落とその周間に衛星的に営まれる小規模集落が所狭しと作られるようになる。なかでも吹上遺跡には金属製武器類や南海産貝輪などの豪華な副葬品を有する豪棺墓で構成される特定集団墓が付隨し、地域の中心的位置を占めていたことが窺える。このことは、中期代の成人用豪棺墓地を集約的に営む遺跡が、日田盆地では吹上遺跡、大肥川流域では大肥遺跡などの拠点的集落に限られることからも明らかである。後期後半に至ると遺跡の数はさらに増加し、盆地沖積地中央部付近の一丁田遺跡⁽¹³⁾や日田条里遺跡千軒地区⁽¹⁴⁾、郷四郎遺跡⁽¹⁵⁾、徳瀬遺跡などで集落が営まれるのみならず、日田盆地各地のあらゆる小河川沿いに遺跡が広がるようになる。求来里川流域の尾瀬遺跡⁽¹⁶⁾・金田遺跡⁽¹⁷⁾・小西遺跡⁽¹⁸⁾・町ノ坪遺跡⁽¹⁹⁾、大山川流域の中川原遺跡⁽²⁰⁾などが好例である。山田原台地周辺では、今泉遺跡⁽²¹⁾、尾部田遺跡⁽²²⁾、本村遺跡⁽²³⁾など台地裾部緩斜面に密度の高い遺跡が営まれ、近年の調査で二串川沿いの沖積地に花ノ木遺跡⁽²⁴⁾なども確認されている。後期後半から末頃にかけては、長者原遺跡⁽²⁵⁾、惣田遺跡⁽²⁶⁾、平島遺跡A区⁽²⁷⁾、三和教田遺跡や吹上遺跡などの各地域で、日田市の特徴とされる環濠集落が見られるようになる。なかでも小追辻原遺跡では環濠集落と政治的意味合いの強い方形環溝建物が出現する過程が確認されており、弥生終末から古墳時代初頭にかけての日田の豪族居館的役割を担っていたものと推測される。

古墳時代

古墳時代前期初頭頃に中心的役割を担っていた小追辻原遺跡が途絶えると、前期後半にかけての集落はほとんど見られなくなるが、近年中期前後にかけての集落が山田原台地西側の花ノ木遺跡で見つかっている。この頃、墓地として小追辻原遺跡東側の独立丘陵上の草場第2遺跡⁽²⁸⁾で方形周溝墓群が営まれるもの、前期古墳の存在は認められない。中期初頭頃には木棺が使われた小追古墳がみられるが、周辺に継続的に作られる古墳は認められず、代わりに横穴墓が後期にかけて台地崖面に無数に作られるようになる。これは市内全域でみられる傾向で、山田原台地周辺では北友田横穴墓や小追横穴墓、羽野横穴墓などがある。この頃の集落は主に谷部に多く、求来里川流域の遺跡では近年中期の初期カマドや朝鮮系土器の存在などが確認されており、一丁田遺跡や荻鶴遺跡では鉄鋤や鍛冶遺構が見つかり、北部九州と同じく半島からの文化の影響を日田でも受けたことをうかがい知ることが出来る。後期には本村遺跡や尾部田遺跡など山田原台地裾部の緩斜面沿いに集落が増加する。この頃宮原台地には市内最大の前方後円墳で、特徴的な須恵器大型平底甌が埴輪として利用される朝日天神山古墳1・2号墳が営まれるようになるものの、後期の古墳はほとんど円墳で占められる。これら円墳のなかには壁画古墳がみられ、ガランドヤ1・2号墳、穴観音古墳、法恩寺山古墳群などが各地の首長墓として作られるのである。



第2図 調査区位置図 (1/15,000)

本範囲は大分県道路地図より

古代

古墳時代の後期の集落域を引き継ぐ形で集落は造られる傾向があるが、いくつかの特徴的な遺跡が発見されている。なかでも近年、日田郡衙の施設の一部と考えられる大型柱穴列が見つかった大波羅遺跡は郡庁で、「大領」銘墨書き土器の発見された小追辻原遺跡は郡司館、円面鏡が発見された三和教田遺跡、墨書き土器の出土した慈眼山遺跡などは官衙関連遺跡と想定されている。

中世

鎌倉室町時代を通じて豊後国日田郡司職を大蔵姓日田氏が治め、15世紀中ごろからは大友姓日田氏が慈眼山に居城を築き、眼下の沖積地に館を作る。この頃の城館が山田原台地周辺には見られ、小追辻原遺跡をはじめとして屋敷地が多数発見されている。

(3) 朝日宮ノ原遺跡周辺の調査履歴

日田盆地北部山田原台地西端の通称「宮原」台地は東西約500m、南北約250mの東西に長くのびる形状で、台地全体に弥生時代の集落遺跡と中世の墳墓群が確認された朝日宮ノ原遺跡が所在する。この宮原台地は畠地総合基盤整備事業により整然とした区画割りがなされた畠地で、あちこちに弥生土器等が散在しており、台地一帯に弥生時代遺跡が広がっていることを物語っている。

この台地上では古くは昭和28年に襄棺墓・石棺墓の存在が確認され、昭和62年度には地力増進事業に伴うA・B区の本調査・試掘調査を市教委が実施して、A区では弥生時代前期末から後期初頭の集落、青磁、湖州鏡、合子などが出土した中世土壤墓などが発見されるものの、B区では削平が著しく遺構の存在は認められていない。

同じく昭和62年度には地力増進事業に伴い、C区の試掘調査を県教委が実施し、大量の遺物の存在と柱穴や土坑群などが確認されている。

昭和63年には畠地造成に伴うD区の調査を市教委が行い、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の墳墓群が多数発見されている。

平成13年には畠地造成による緊急調査に伴い弥生中期から後期の墳墓群が調査されている。これらのことから、台地の北側及び南側の両端に時期を逆えて墳墓群が所在し、中央部には中期から後期の集落が所在し、中世墳墓が展開していたものと考えられる。

そのほか、遺跡の所在する宮原台地の先端には6世紀前半の前方後円墳2基で形成される朝日天神山古墳群が所在している。平成9~14年にかけて5次の調査が行われるなかで、墳墓群の下層には弥生中期の土器などが多数出土しており、弥生集落が台地先端まで展開していたものと想像される。

このような調査履歴から、台地全面に弥生遺跡が広がっていたものと思われるが、近年の畠地造成による削平が著しく、遺跡が所在しない箇所が多いものと予測される。

《参考文献》

- 千田昇「日田・玖珠地域の地形一とくに台地地形について」『日田・玖珠地域-自然・社会教育-』大分大学教育学部 1992
渡川光夫「弥生文化」『大分県の考古学』1971
渡川光夫「箱式石棺を有する葬儀」『考古学雑誌』第40巻第3号 1954
日田市教育委員会「朝日宮ノ原道路」「日田地区遺跡群発掘調査概報」Ⅲ 1988
日田市教育委員会「朝日宮ノ原道路(Ⅱ)」「日田地区遺跡群発掘調査概報」Ⅳ 1989
大分県教育委員会「朝日宮ノ原道路C地区」「昭和62年度 大分県内遺跡群分布調査概報」7 1988
上原和幸・友岡信彦「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世土壤墓」「わおいた考古」2 大分県考古学会 1989
若杉竜太編「朝日天神山古墳群」日田市埋蔵文化財調査報告書第60集 2005

第3章 朝日宮ノ原遺跡D区の調査

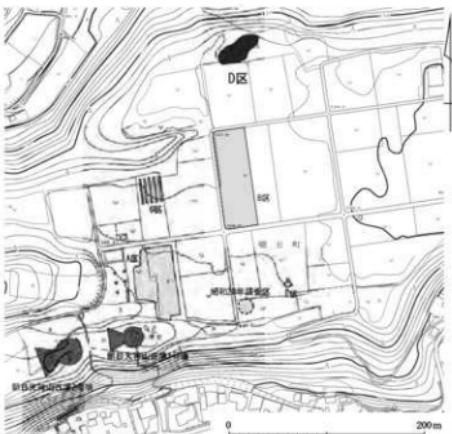
(1) 調査の内容（第3図）

発掘調査区は、遺跡の存在する宮原台地の北側中央部の台地縁辺部にあたり、北に向かって傾斜する場所である。過去におけるこの遺跡調査は、台地南側の昭和28年調査区やA区、中央部のB・C区で実施してきたが、台地北側の調査は始めてとなる。

調査では機械を使って表土を除去すると、表土下は暗茶褐色土の地山となり、遺構検出面となる。この地山は、この遺跡内はもちろんのこと、他の周辺台地上での遺跡のあり方と同様で、地山のさらに下部は黄色の粘土質の強い土質となる。今回の調査区は南北方向に約20m、東西方向に約46mの調査面積は688m²である。調査区の最も高い場所で標高約119m、最も低い場所で約116.5mの比高差3.5mを測る。

D区で発見された遺構は、甕棺墓1基、壺棺墓1基、箱式石棺墓4基、土壙墓24基、溝2条、土塙5基である（第4図）。このうち、甕棺墓・壺棺墓・箱式石棺墓・土壙墓などの埴墓群は、調査区中央にまとめて検出し、溝は調査区北側で、その一部の確認にとどまっている。また、調査区のほぼ中央には、大きく搅乱を受けた掘りこみが見受けられた。

こうした遺構については、現地作業では検出した遺構毎に遺構番号を付している。このため報告にあたっては、調査中の遺構番号を踏襲することとし、遺構番号が欠番の遺構もそのままとしている。



第3図 朝日宮ノ原遺跡D区調査区位置図(1/5,000)

(2) 遺構と遺物

甕棺墓（第4・5・6図、写真図版1・3・10）

1号が該当する。この甕棺墓は調査区北側の傾斜が急になる位置で検出した。甕棺上部は、溝によって一部削平を受けている。墓壙は長軸が109cm、短軸で74cm、深さ83cmを測る。甕棺の開口部や棺内に板石片が認められることにより、蓋石を有する單棺であったものと推定される。棺内には、副葬品や人骨は残っていないかった。

壺棺（第6図）は口縁部が「く」の字状に外反し、口縁下に一条の三角突帯をもつ。甕棺の肩部に最大径があり、胴部下半には一条の三角突帯が巡る。内外面ともに刷毛目の調整が施されている。底部は丸みをもつ不安定な底をしている。

壺棺墓（第4・7～9図、写真図版2、3、10）

調査区の東側で検出した39号が該当する。墓壙は長軸が108cm、短軸で67cm、深さ51cmを測る。壺を探用した單棺で、その口縁部には打ち欠いた胴部から底部の壺で覆っている。また、單棺底部は欠損しており、それを覆うように2つの壺で覆っている。壺棺内部には副葬品はなかったが、棺外副葬品として壺土中から袋状鉄斧が出土している。外面に赤色顔料の一部が付着している。人骨も残っていないかった。



第4図 朝日宮ノ原遺跡D区遺構配置図（1/200）

壺棺（第8図）のうち、1は複合口縁である。口縁部は内傾し、肩部は丸みをもち、胴部全体は卵形をなす。胴部中央上位に一条の突帯を巡らす。底部は欠損しているが、丸みをもつ平底と推定される。内外面とも、ハケによる調整。口径20.9cm、器高68.5cmを測る。2は1の口縁部を覆っていた表で、胴部上部は打ち欠かかれている。底部は丸底をなし、外面はハケ、内面はケズリの痕跡が残る。3・4は、2の底部を覆っていた裏である。3は、口縁部と胴部の大半を欠く。外面はハケ、内面はケズリ。4は口縁部と底部を欠く。外面はハケ、内面はケズリ。3と4は同一個体ではなく、1と3は同一個体の可能性がある。この壺棺には棺外副葬品として、袋状鉄斧が出土している（第9図）。

箱式石棺墓（第4・10～13図、写真図版1・2・4）

3・23・26・36号が該当する。3・23・26号は、畠地造成中に破壊を受けており、石蓋は存在しない。

3号墓（第10図）は側面に4枚の板石を用いており、床面と側石内面に赤色顔料が認められる。副葬品はなく、人骨も残っていないかった。

23号は（第11図）、側石の一部と東側の小口石しか残っていない。22号土壤幕と切り合い関係にある。側石内面に赤色顔料が認められ、副葬品はなく、人骨も残っていないかった。

26号（第12図）は側石、小口石など大きく破壊を受けている。副葬品はなく、人骨も残っていないかった。

36号（第13図）は3枚側石を用いており、蓋石は甲重ねの上に隙間を補うように板石数枚を置く。赤色顔料の痕跡や副葬品は認められず、人骨も残っていないかった。

土壤墓（第4・14～38図、写真図版1・2・5～10）

石蓋の有無によって、石蓋土壤墓と無蓋土壤墓に区別されるが、現状での判別であるため、無蓋土壤墓のなかには34号は石蓋を用いていた可能性もある。前者は2・6・7・9～16・19～21・25・27・35・37・38の19基、後者は4・8・17・22・34号の5基である。以下、石蓋土壤墓と無蓋土壤墓に区分して報告する。

石蓋土壤墓

2号（第14図）は、床面が隅丸長方形をなす。石蓋に使用されていたと考えられる石材片がみられた。副葬品や人骨は認められなかった。

6号（第15図）は床面が隅丸長方形をなし、床全面にわたって赤色顔料が認められる。2段掘りで、石蓋は甲重ねとしている。副葬品や人骨は認められなかった。7号と切り合い関係にあり、7号より新しい。

7号（第16図）は楕円形に近い土壤中央に墓壙がみられ、その石蓋は甲重ねとしている。副葬品や人骨は認められなかった。

9号（第17図）は東側が頭位と考えられ、足位側に長さ45cm、幅24cm、深さ20cmの隅丸方形をなす足元掘り込みの痕跡が認められた。2段掘りで、石蓋は甲重ねとしている。副葬品や人骨は認められなかった。8号と切り合い関係にあり、8号より新しい。

10号（第18図）は床全面に赤色顔料が認められ、床の東側は一段高くしている。そこには粘土痕跡が残っており、東側が頭位で、粘土枕が置かれていたと考えられる。副葬品や人骨は認められなかった。なお、埋土中からは宋銭（紹聖元宝）が出土している。

11号（第19図）は、遺構の依存状態が良くない。しかしながら、床全面には赤色顔料の痕跡が認められた。副葬品や人骨は残っていないかった。

12号（第20図）は、石蓋と側石の一部が残る。石蓋は甲重ねとしている。側石一枚は13号を切って造営した際のもので、この墓の床面の一部に13号床面の赤色顔料の続きが確認できた。副葬品や人骨は残っていないか

った。

13号(第21図)は、床全面に赤色顔料が認められる。副葬品や人骨は残っていなかった。

14号(第22図)は二段掘りで、土壌は木根による搅乱が著しい。墓壙上には甲重ねの石蓋が残る。刀子の先端部と考えられる鉄製品が出土したが紛失。人骨は残っていなかった。

15号(第24図)は墓壙の東側に2枚の板石が残り、その下部床面に赤色顔料の痕跡が認められた。頭位を指すものと考えられる。副葬品や人骨は残っていなかった。

16号(第25図)は土壌内に一段の墓壙が認められ、この床全面には赤色顔料が残っており、厚い所で7cmを測る。この赤色顔料の量は、他の墓と比較しても、その量はずば抜けて多い。この赤色顔料の中からは素環頭刀子が出土した。この素環頭刀子は、墓壙の大きさからすれば、足元付近に副葬されたと考えられる。石蓋は甲重ねである。人骨は残っていなかった。

素環頭刀子(第23図)は、全長20.8cm、刃部長12.8cm、刃部最大幅1.6cm、把部5.3cm、把幅1.2cm前後を測る。閏を有しており、先端部付近はわずかに外反する。環頭部は、その端部を折り曲げ、把部に接合させている。

19号(第26図)は遺存状態が悪く、墓壙内に石蓋の破片が散乱している。副葬品や人骨は残っていなかった。

20号(第27図)は19号同様に遺存状態が悪く、墓壙内に石蓋の破片が散乱していた。副葬品や人骨は残っていなかった。

21号(第28図)は二段掘りで、墓壙上に石蓋がわずかに残っていた。副葬品や人骨は残っていなかった。

25号(第29図)は21号と同様二段掘りで、墓壙上に石蓋がわずかに残っていた。床全面には赤色顔料が残る。副葬品や人骨は残っていなかった。

27号(第30図)は、かろうじて墓壙ラインを検出できた。床面の一部には赤色顔料が残る。副葬品や人骨は残っていなかった。

35号(第31図)は床面の大半に赤色顔料が残っており、床の東側は一段高くし粘土枕としている。副葬品や人骨は残っていなかった。

37号(第32図)は、石蓋を甲重ねとしている。副葬品や人骨は残っていなかった。

38号(第33図)は他の墓に比べると小型で、石蓋の数も少なく甲重ねとはしていない。副葬品や人骨は残っていなかった。

無蓋土壙墓

4号(第34図)は二段掘りで、土壙は長方形をなすと思われる。墓壙からは、副葬品や人骨は出土していない。

8号(第35図)は墓壙が長さ2mを超える。9号に切られる。墓壙からは、副葬品や人骨は出土していない。

17号(第36図)は床全面に赤色顔料が残る。墓壙からは、副葬品や人骨は出土していない。

22号(第37図)は土壙の対角線上に墓壙を設ける。墓壙からは、副葬品や人骨は出土していない。

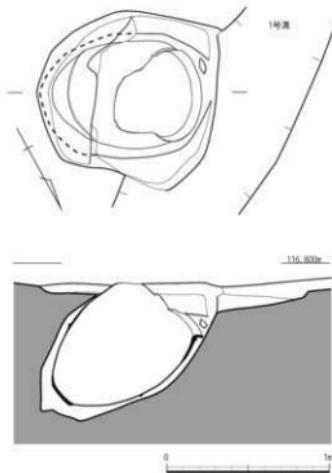
34号(第38図)は二段掘りで、土壙は長方形をなすと思われる。墓壙からは、副葬品や人骨は出土していない。

溝(第4図、写真図版9)

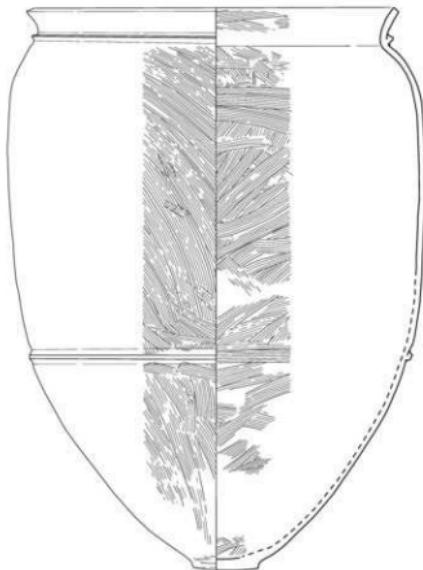
調査区の南側で2条確認している。調査中は新しい時期の溝と考えていたが、2つの溝とも屈曲する様子が見受けられることから、方形周溝墓などに伴う溝の可能性もある。

1号溝は、検出での長さが9.5m、幅が1m前後、深さ10cm前後を測る。東側で屈曲する様子がうかがえる。遺物は出土していない。

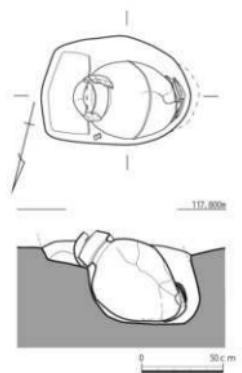
2号溝、検出での長さが11m、幅が1.4~2.5m前後、深さ15cm前後を測る。東側で屈曲する。遺物は、



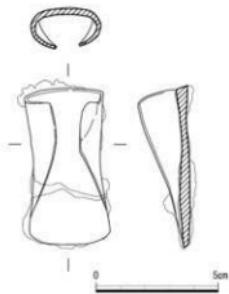
第5図 1号墓実測図 (1/30)



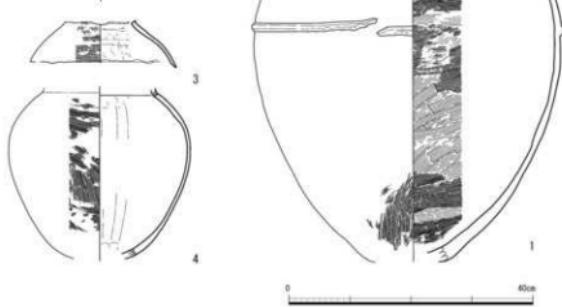
第6図 1号墓壺棺実測図 (1/8)



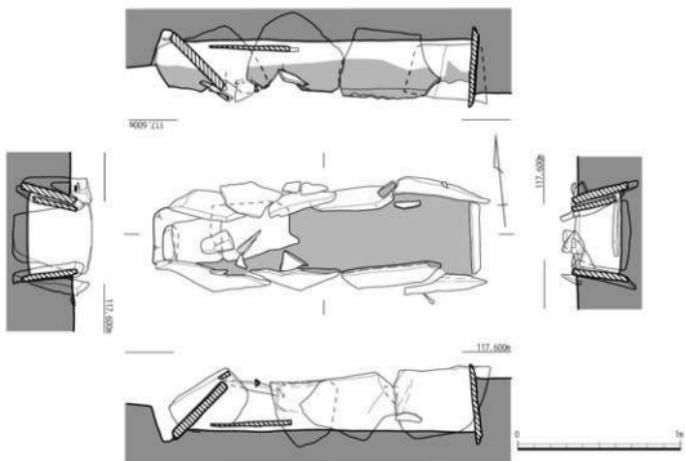
第7図 39号墓実測図 (1/30)



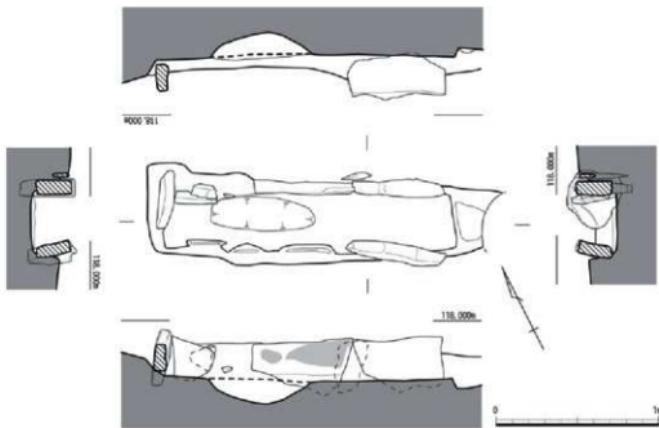
第9図 39号墓出土鉄器実測図(1/2)



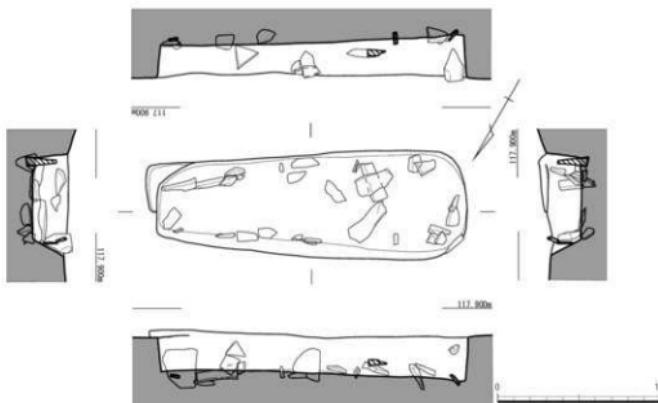
第8図 39号墓壺棺実測図 (1/8)



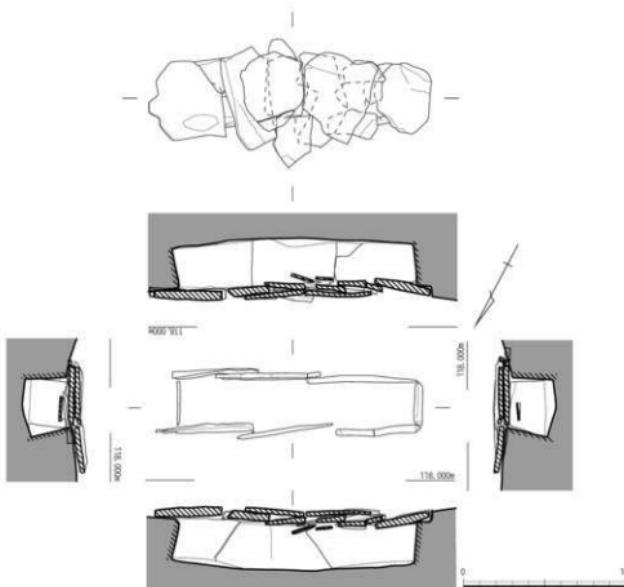
第10図 3号墓実測図 (1/30)



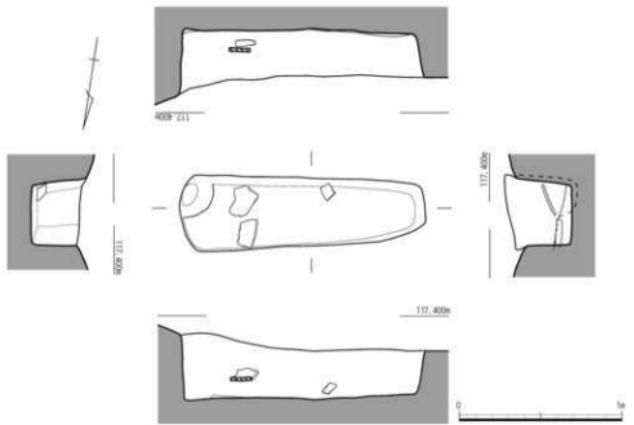
第11図 23号墓実測図 (1/30)



第 12 図 26 号墓実測図 (1/30)



第 13 図 36 号墓実測図 (1/30)



第14図 2号墓実測図 (1/30)

甕や高环などの破片が出土している。

土坑（第39図、写真図版9）

18・24・29～31号が該当する。

18号は円形に近い不整形プランをなし、長軸が122cm、短軸が108cm、深さ13cmを測る。削平が著しく、埋土中に石材片が流れ込んでいる。遺物は出土していない。

24号は不整形プランをなし、長軸が133cm、短軸が72cm、深さ22cmを測る。削平が著しく、埋土中に石材片や土器片が流れ込んでいる。

29号は長方形プランをなし、長軸が141cm、短軸が97cm、深さ12cmを測る。削平が著しい。遺物は出土していない。

30号は二段振りの不整形プランをなし、長軸が102cm、短軸が62cm、深さ41cmを測る。甕の口縁部片が出土している。

31号は不整形プランをなし、長軸が120cm、短軸が79cm、深さ13cmを測る。削平が著しい。遺物は出土していない。

その他の出土遺物（第40図、写真図版10）

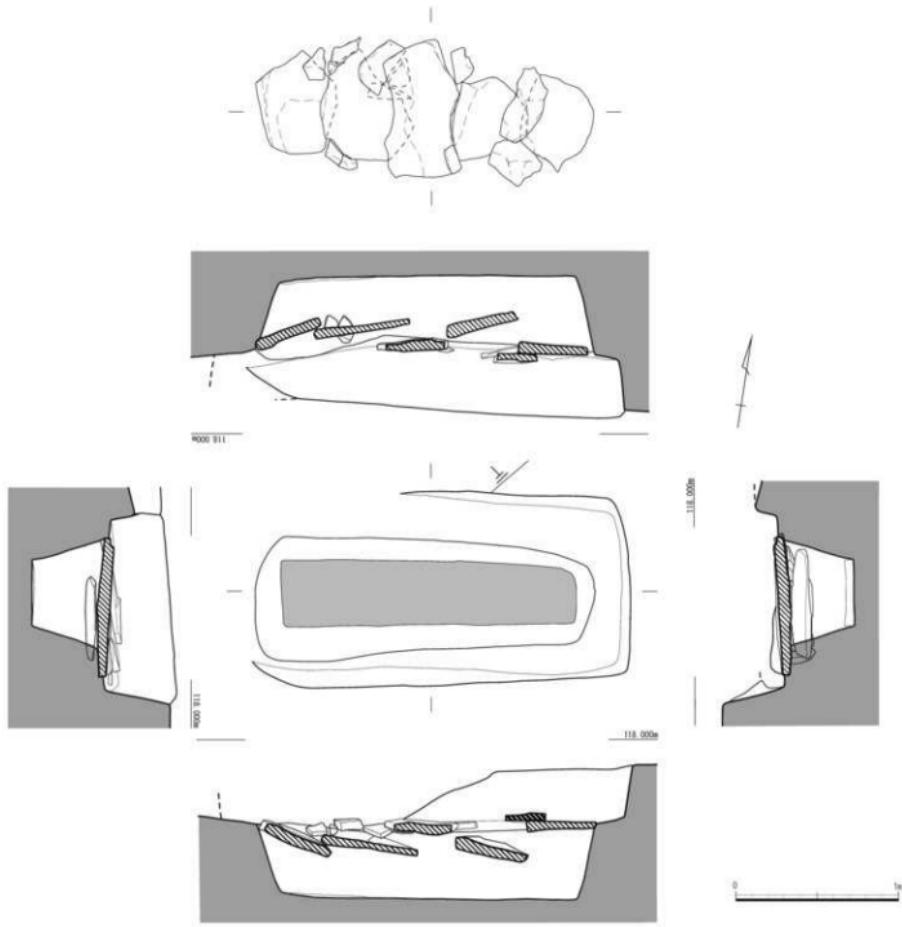
遺跡から出土した一括遺物である。

1～11は甕で、いずれも胴部下半を欠く。1～8・10・11は口縁部が「く」の字状に外反する。9・10は口唇部を上部につまみ上げる。10・11は口縁下に一条の三角突帯を巡らせる。

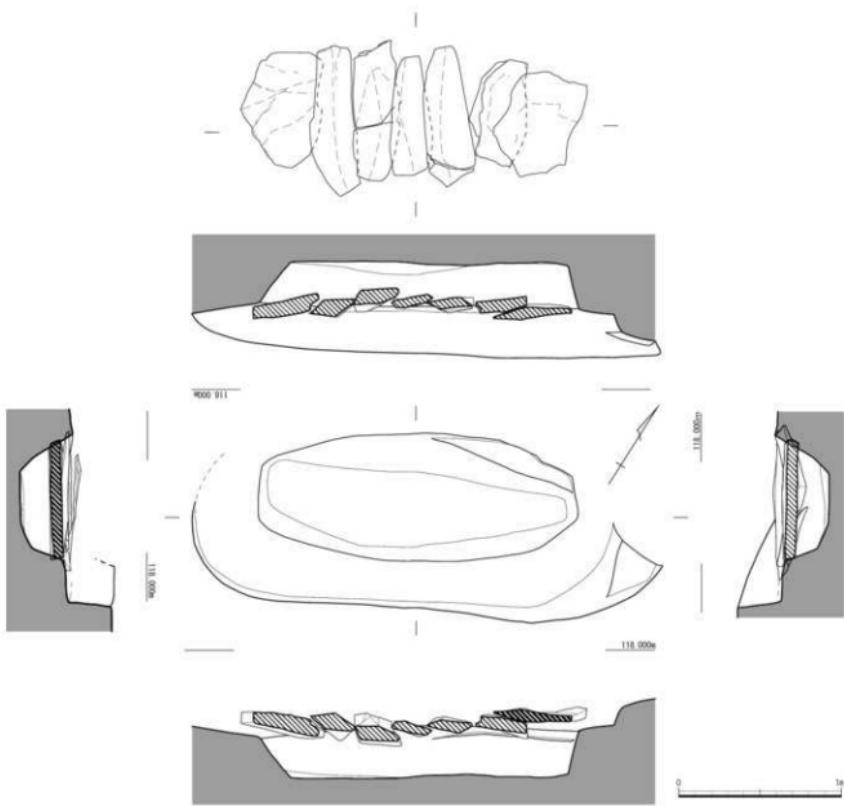
12～15は壺である。12は口縁部が長く、大きく外反する。13は口縁部が重ね気味の「T」字状をなし、平坦面に円形浮文が付く。口縁部下には、一条の三角突帯が巡る。14は口縁部下と胴部に一条の突帯を巡らす。底部は平底であろう。15は胴部上半部を欠く。底部付近に孔を穿つ。

16は安山岩製の縦型の石匙である。

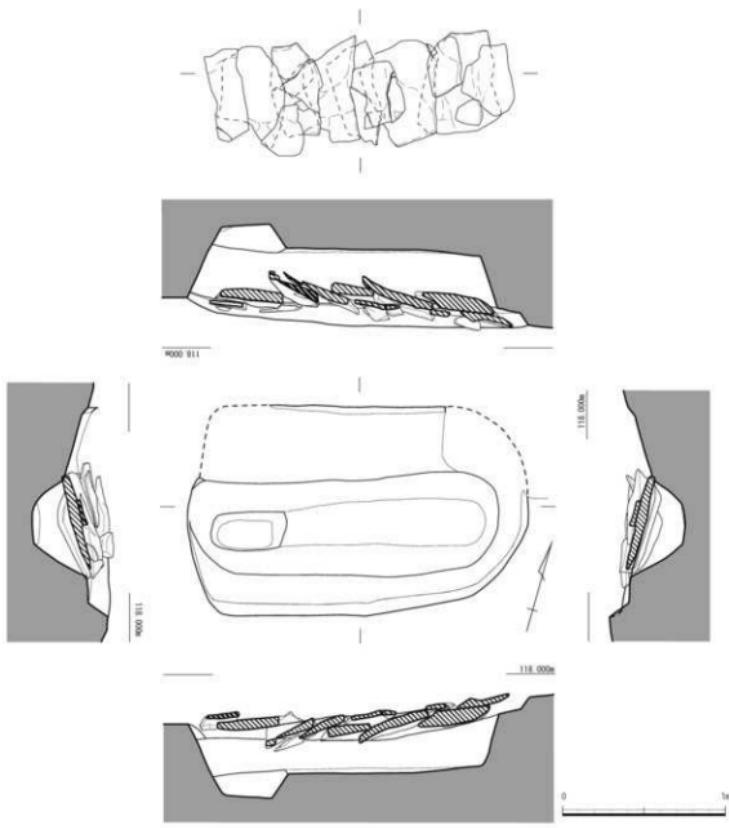
このほかにも、朱塗の弥生土器片や黒曜石の破片、青磁・白磁片などもある。



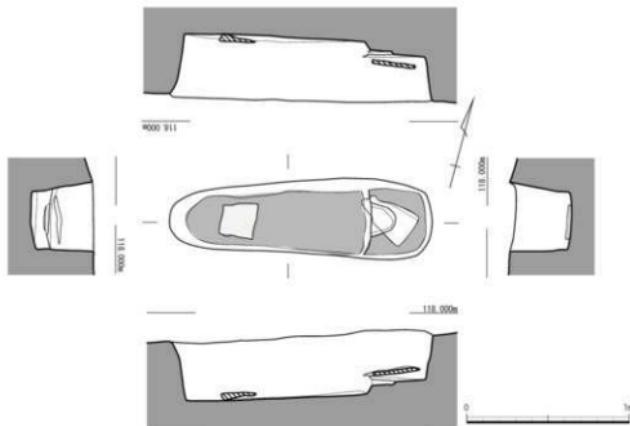
第15図 6号墓実測図 (1/30)



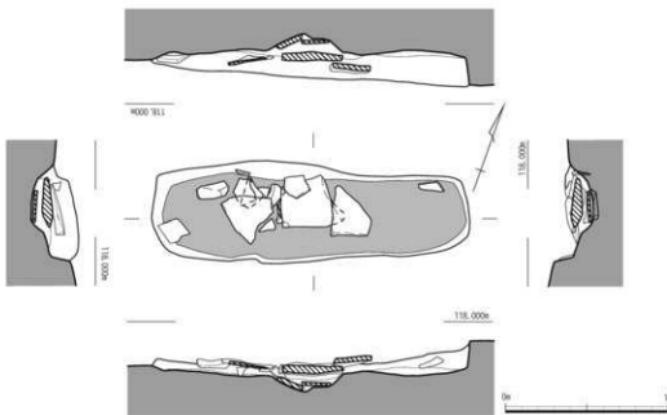
第 16 図 7 号墓実測図 (1/30)



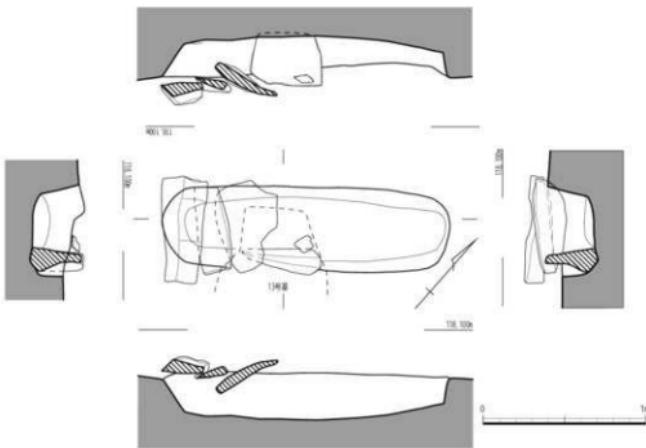
第17図 9号墓実測図 (1/30)



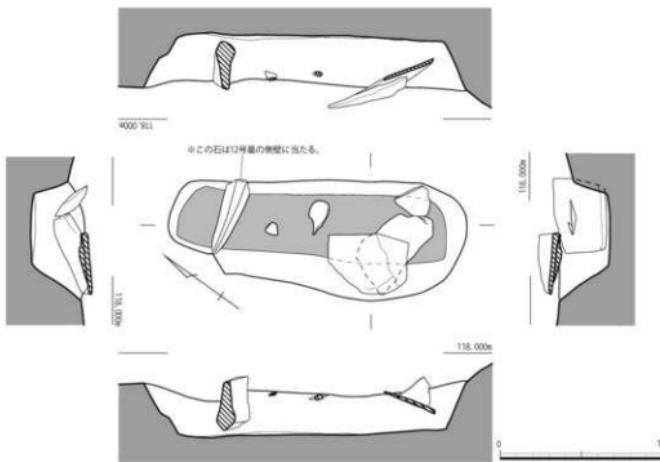
第18図 10号墓実測図 (1/30)



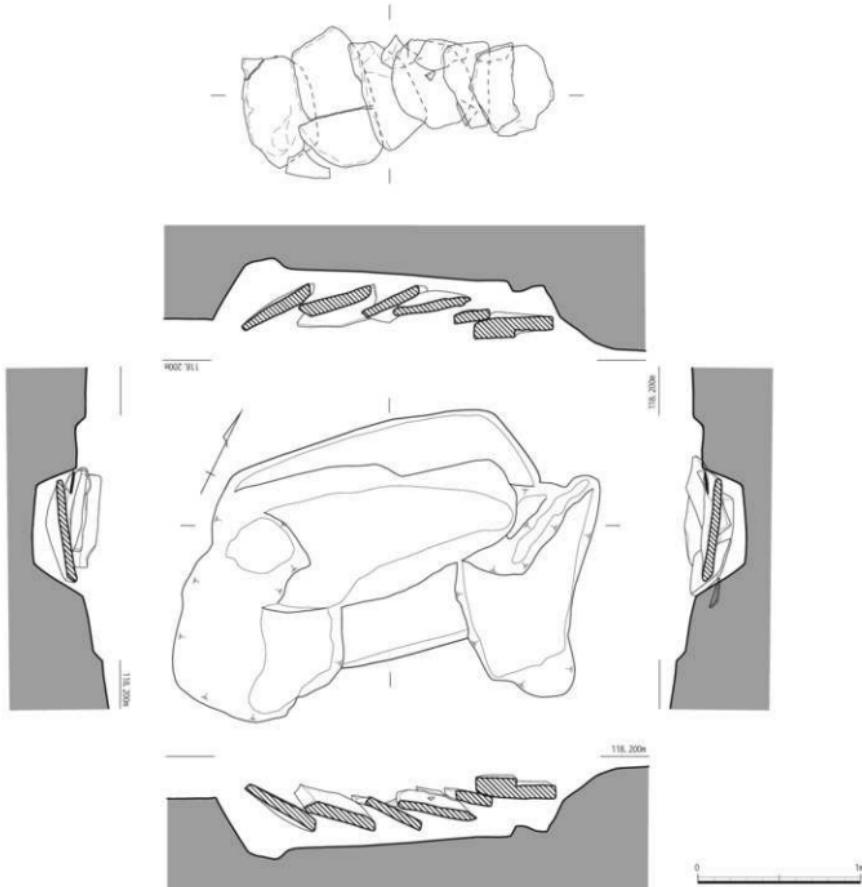
第19図 11号墓実測図 (1/30)



第20図 12号墓実測図 (1/30)



第21図 13号墓実測図 (1/30)



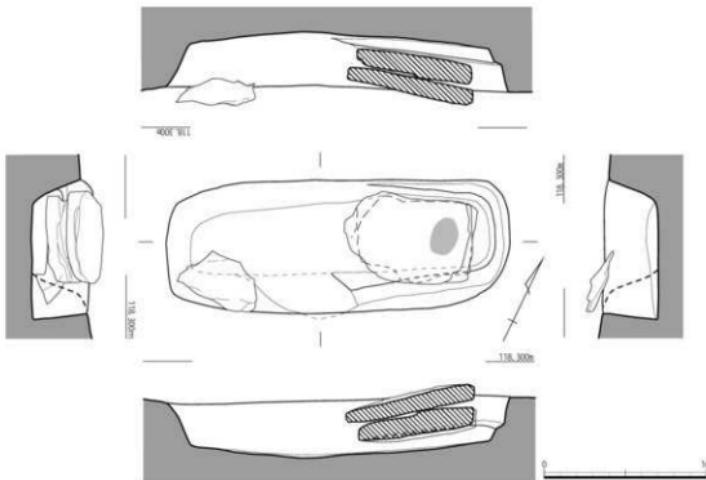
第22図 14号墓実測図 (1/30)



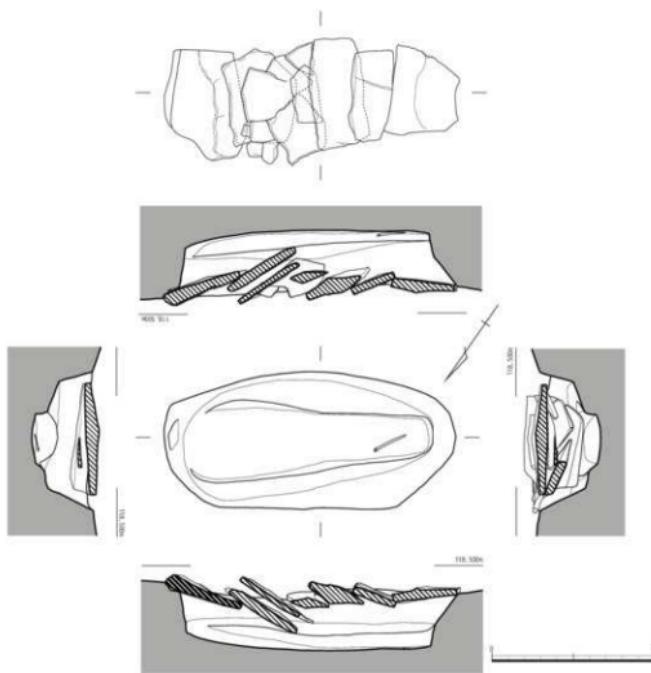
第23図 16号墓出土鉄器実測図 (1/2)



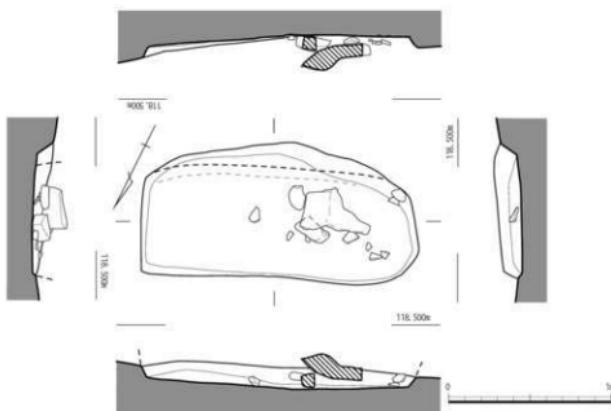
写真4 16号墓出土鉄器X線写真



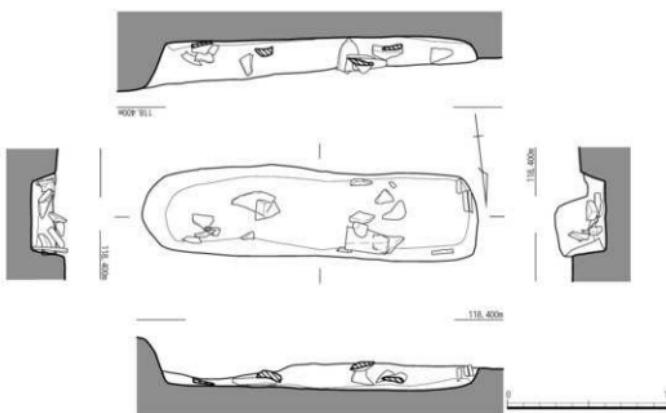
第24図 15号墓実測図 (1/30)



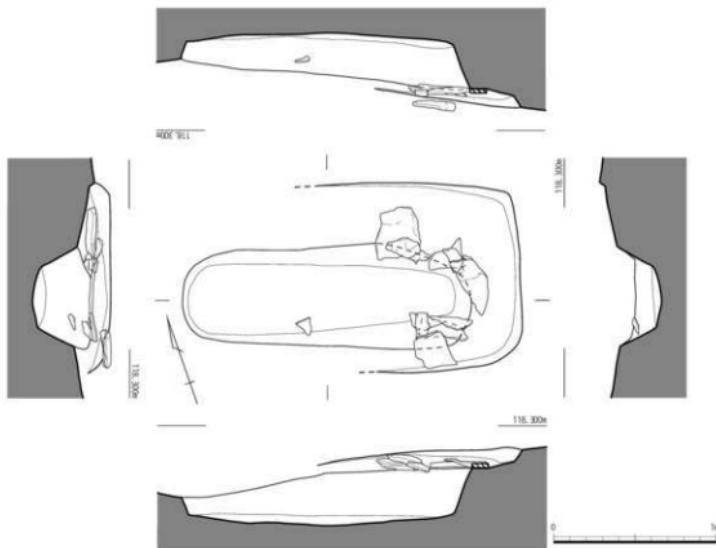
第25図 16号墓実測図 (1/30)



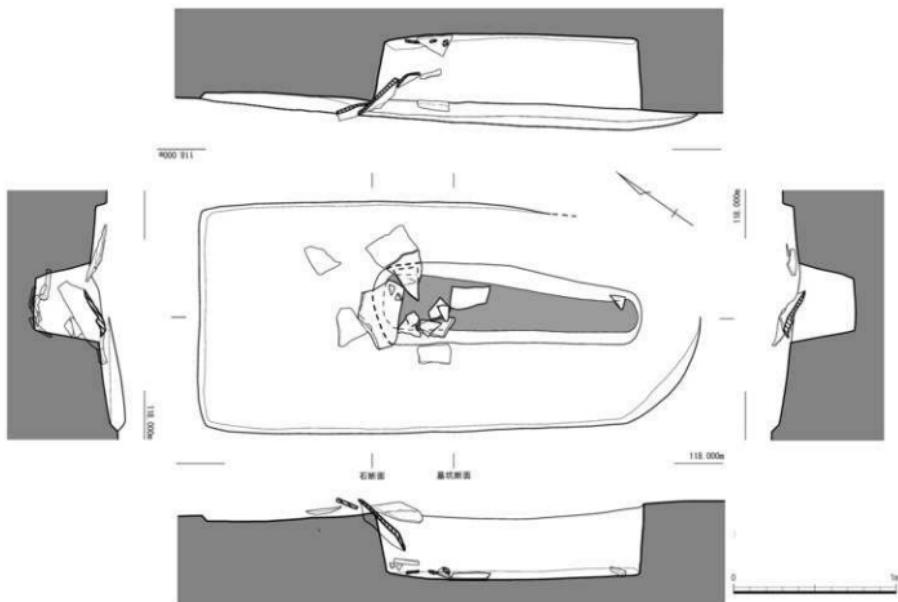
第26図 19号墓実測図 (1/30)



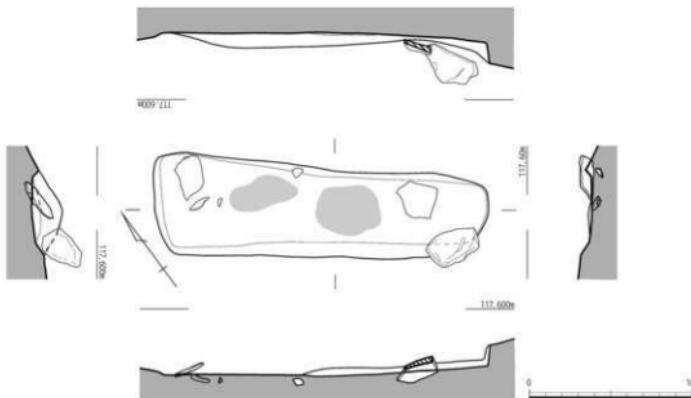
第27図 20号墓実測図 (1/30)



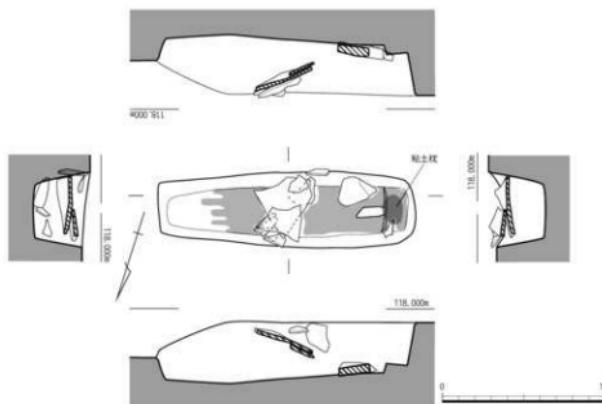
第28図 21号実測図 (1/30)



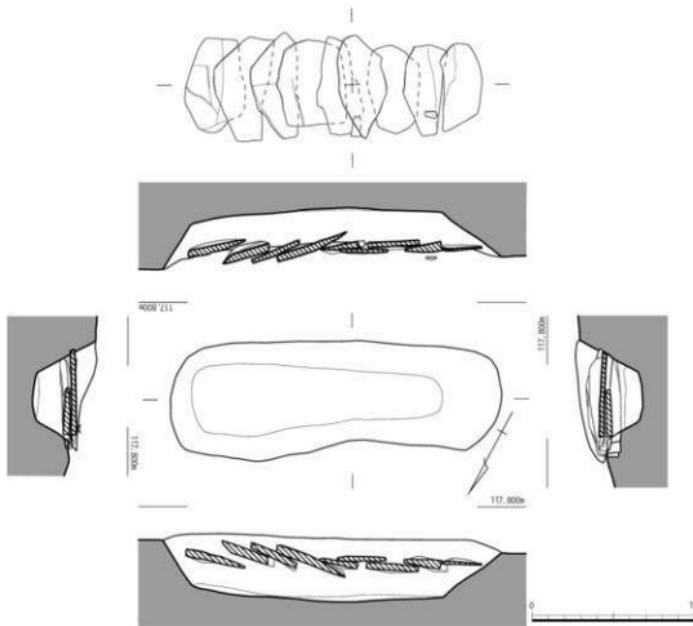
第29図 25号墓実測図 (1/30)



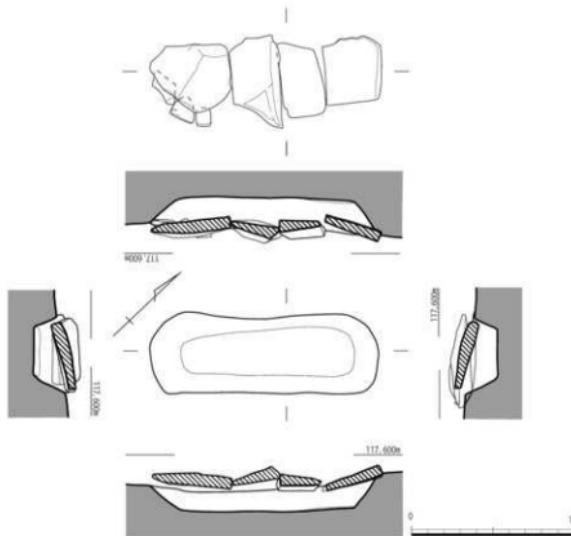
第30図 27号墓実測図 (1/30)



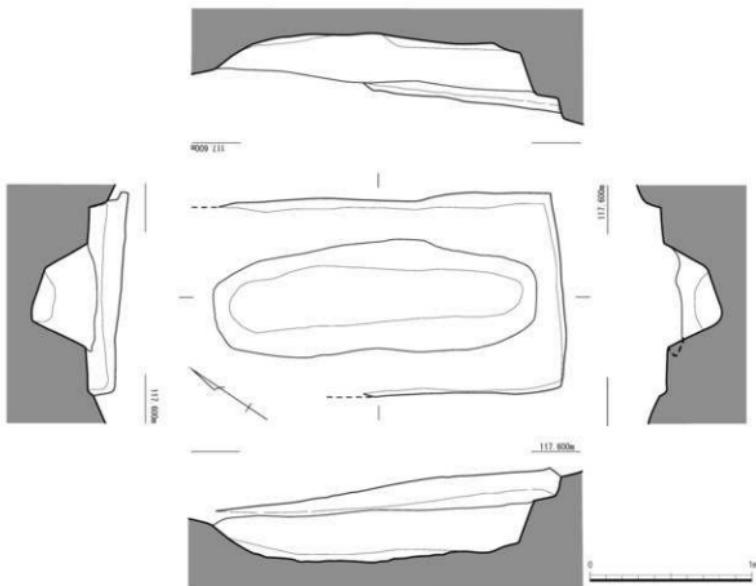
第31図 35号墓実測図 (1/30)



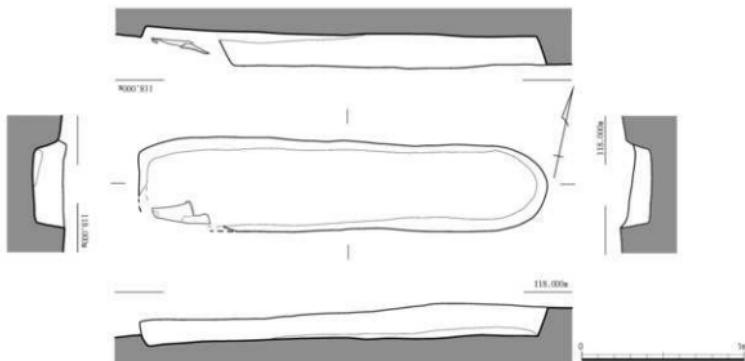
第32図 37号墓実測図 (1/30)



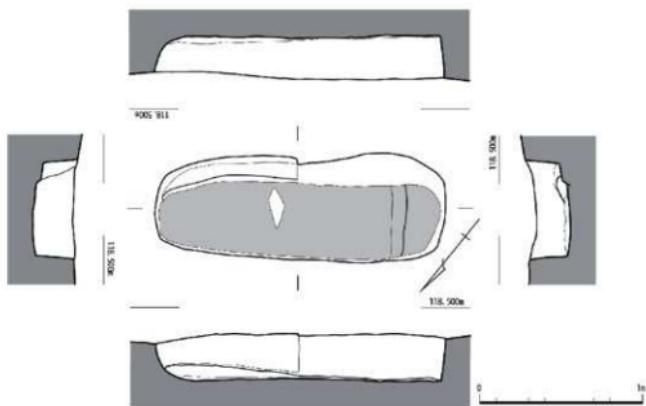
第33図 38号墓実測図 (1/30)



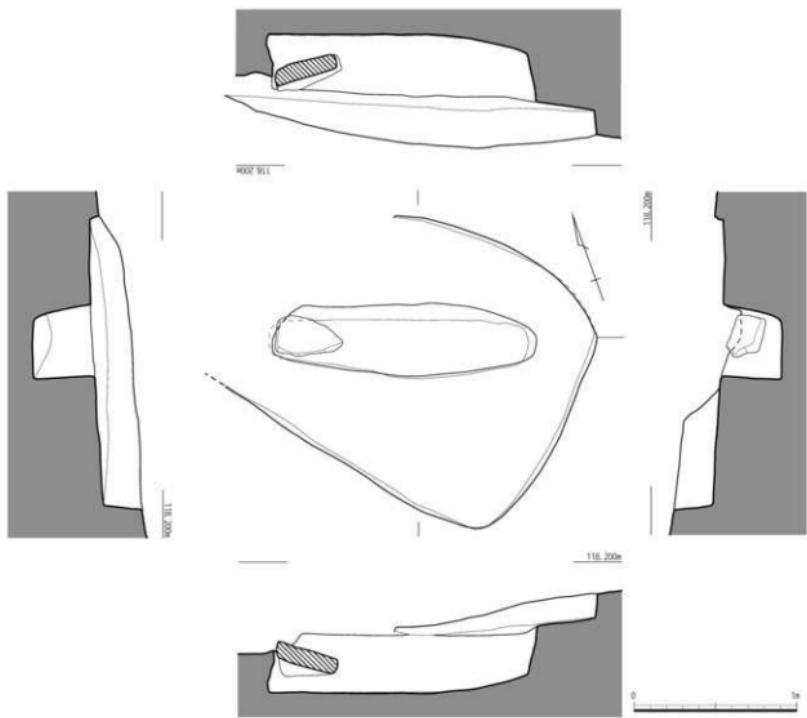
第34図 4号墓実測図 (1/30)



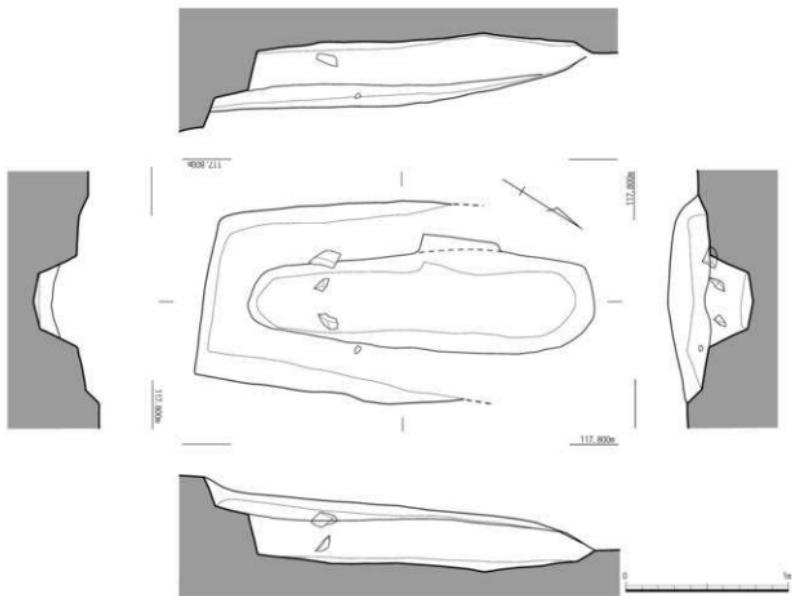
第35図 8号墓実測図 (1/30)



第36図 17号墓実測図 (1/30)



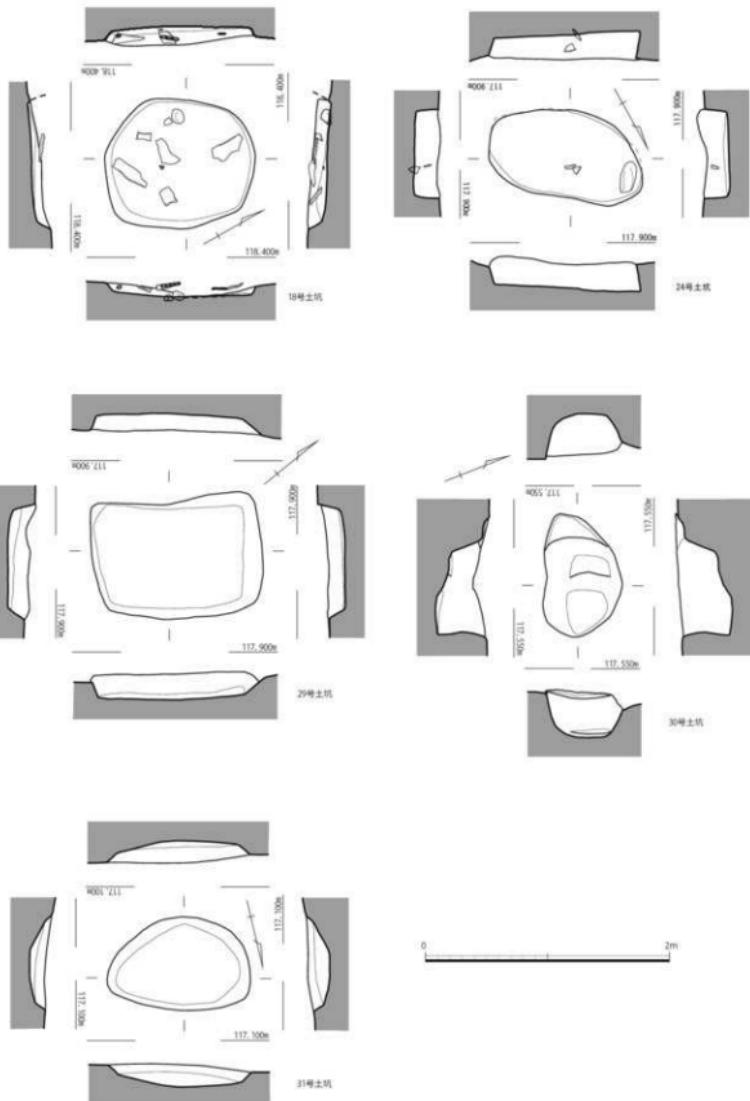
第37図 22号墓実測図 (1/30)



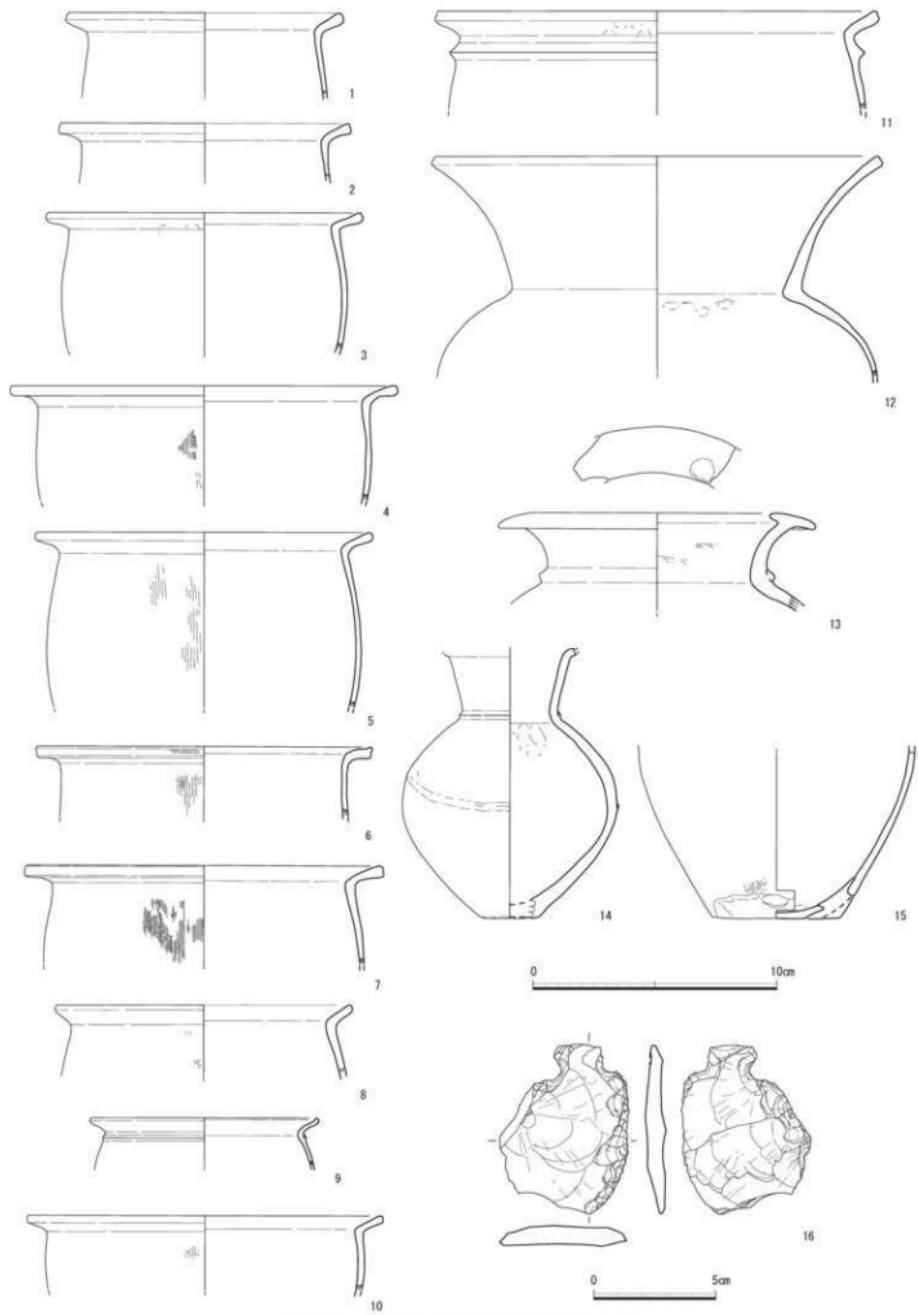
第38図 34号墓実測図 (1/30)

第1表 朝日宮ノ原遺跡D区填墓計測表

測定番号	遺跡番号	種別	主軸	墓 墓			土 壁			床 面			埋葬角度	赤色顔料	副葬品	石 材	備 考
				長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ					
5	1	埴輪馬	E-29-N	74	109	83	-	-	-	-	-	-	40	-	-	-	-
7	39	埴輪馬	W-13-N	108	67	51	-	-	-	-	-	-	34	-	袋状馬具	-	-
10	3	石棺	W-5-S	-	-	-	177	41	42	184	45	-	-	-	床面、側石	-	安山岩
11	23	石棺	W-27-S	-	-	-	218	57	26	180	39	-	-	-	側石内面	-	安山岩 甲重ね
12	26	石棺	E-29-S	-	-	-	191	67	24	-	-	-	-	-	-	-	安山岩
13	36	石棺	W-27-N	-	-	-	144	29	31	149	35	-	-	-	-	-	安山岩 甲重ね
14	2	土坑墓(石造)	W-10-N	-	-	-	150	47	39	142	39	-	-	-	-	-	安山岩
15	6	土坑墓(石造)	E-10-S	231	108	35	209	76.5	46	180	41	-	床面	-	-	-	安山岩 甲重ね
16	7	土坑墓(石造)	E-27-S	289	117	29	197	78	29	184	46	-	-	-	-	-	安山岩 甲重ね
17	9	土坑墓(石造)	W-18-N	210	128	11	190	64.5	36	169	29	-	床面	-	-	-	安山岩 甲重ね、足位振り込み
18	10	土坑墓(石造)	W-15-N	-	-	-	161	49	36	147	40	-	床面	-	-	-	安山岩 塗灰枕
19	11	土坑墓(石造)	E-19-S	-	-	-	197	63	21	186	52	-	床面	-	-	-	安山岩
20	12	土坑墓(石造)	E-25-S	-	-	-	177	51	28	160	39	-	-	-	-	-	安山岩 甲重ね
21	13	土坑墓(石造)	S-33-W	-	-	-	183	73	32	165	42	-	床面、側石	-	-	-	安山岩
22	14	土坑墓(石造)	E-44-S	186+a	140	-	155+a	89	30	152+a	60	-	刀子?	-	-	-	安山岩 甲重ね
24	15	土坑墓(石造)	W-29-N	-	-	-	211	81	34	184	45	-	床面一部	-	-	-	安山岩 甲重ね
25	16	土坑墓(石造)	W-39-N	177	84	-	153	49	42	149	42	-	素面頭刀子	-	-	-	安山岩 甲重ね
26	19	土坑墓(石造)	W-2-S	-	-	-	179	87	11	164	64	-	-	-	-	-	安山岩
27	20	土坑墓(石造)	E-7-N	-	-	-	206	59	31	187	44	-	-	-	-	-	安山岩
28	21	土坑墓(石造)	E-18-N	209+a	116	12	117	64	35	164	43	-	-	-	-	-	安山岩
29	25	土坑墓(石造)	N-31-E	307	142	10	164	49	41	156	34	-	側石内面	-	-	-	安山岩
30	27	土坑墓(石造)	E-49-N	-	-	-	205	63	19	199	58	-	床面一部	-	-	-	安山岩
31	35	土坑墓(石造)	E-19-S	-	-	-	159	47	38	149	31	-	床面一部	-	-	-	安山岩 地山枕
32	37	土坑墓(石造)	W-28-N	-	-	-	203	73	37	153	45	-	-	-	-	-	安山岩 甲重ね
33	38	土坑墓(石造)	W-28-N	-	-	-	141	42	23	107	30	-	-	-	-	-	安山岩
34	4	土坑墓(無蓋)	N-37-E	214	124	20	198	72	38	180	36	-	-	-	-	-	安山岩
35	8	土坑墓(無蓋)	E-11-S	-	-	-	251	58	21	237	46	-	-	-	-	-	地山成形枕
36	17	土坑墓(無蓋)	E-38-S	-	-	-	178	68	28	173	46	-	床面	-	-	-	地山成形枕
37	22	土坑墓(無蓋)	W-21-S	198+a	167	18	162	45	35	159	36	-	-	-	-	-	地山成形枕
38	34	土坑墓(無蓋)	N-31-E	245+a	125	22	213	62	29	196	40	-	-	-	-	-	地山成形枕



第39図 土坑実測図 (1/40)



第40図 その他の出土遺物実測図 (1/2, 1/4)

(3) 小結

今回のD区調査は、台地北側斜面に形成された主に30基の墳墓からなる。こうした墳墓群は調査区中央に集中するA群(1~34号)と、西側に散在するB群(35~38号)に区分され、A群はさらに主軸方向から、大きく南北軸と東西軸の2つに分けることができる。以下、各群についてみてみる。(第41図)

まず、A群の南北軸の墳墓は、主軸が地形等高線に直行するもので、1・13・22・25・27・34号墓が該当する。このうち1号墓の壺棺は、短く外反する口縁部、口縁部下の張りのある肩部、胴部下位の突帯、不安定な平底をなす。近接する草場第2遺跡^[注1]では、壺棺の口縁部矮小化と底部丸底化の傾向が指摘されており、同遺跡の壺I-b類(152号)や壺II類(154号)に類似する。橋口達也氏編年^[注2]のKIVc~KIVdに並行するものと考えられる。22号の土壙墓は墓壙の対角線上に土壙を設ける特徴を有しており、豊前地域の影響によるものである。草場第2遺跡でも1基(56号墓)確認されており、弥生時代後期後半から末に位置付けられている。

A群の東西軸の墳墓は、主軸が地形等高線に沿うもので、その配置からさらに細分も可能と思われるが、ここでは一括しておく。16号墓から素環頭刀子が出土している。その形態は、環頭部が円形ではなく、柄の背部から直線的にのびて環頭部を作り出した不整円形をなす。児玉真一氏^[注3]のII型に相当し、長さや形態から沙井掛遺跡D189出土品に類似しており、遠賀川流域の影響によるものと考えられる。時期的には、弥生時代後期終末から古墳時代前期に比定されよう。また、14号墓でも鉄製品が副葬されており、A群の東西軸の墓地では副葬品を有する墓地が地形の高い場所に営まれている。このほか、床面に赤色顔料を施したものや枕整形を施したもの、床面の足位掘り込みがみられる墓が、A群の東側南北方向に集中する傾向も認められる。

次にB群であるが、39号墓の壺棺墓には壺棺を主体に甕が用いられている。壺棺に用いられた複合口縁甕は類例を探しきれなかったが、壺棺の補強に使用されている甕は肩部の張り具合や内面ケズリ調整、底部丸底といった特徴から布留式土器に相当する。この群では唯一鉄斧を棺外副葬している。草場第2遺跡でも壺棺墓には副葬品は見られず、壺棺(180号)に鉄劍が副葬されることに似ている。この39号墓に隣接する37・38号も同時期であろう。

以上のことから、この墓地での造営はA群のなかにあって12号が13号を切っていることから、南北軸が古く、東西軸が新しいと考えられる。またA・B群についてはB群の39号壺棺墓の時期からして、A群が古く、B群が新しいと推定される。従って、この墓地ではA群の主軸が南北方向を示す壺棺墓+箱式石棺墓+土壙墓、次にA群の主軸が東西方向を示す箱式石棺墓+土壙墓、さらにB群の壺棺墓+箱式石棺墓+土壙墓の順に営まれた、弥生時代後期後半~終末以後、古墳時代前期まで続く墓地と理解しておきたい。

また、墳墓全体では、副葬品についてはその数は少なく、



第41図 墳墓群配置図 (1/300)

甕棺墓には副葬品は持たず、16号石蓋土壙墓に素環頭刀子、39号甕棺墓に鉄斧が見られる程度である。墳墓構成は甕棺墓・壺棺墓が各1基で、主体は土壙墓といえる。副葬品を有している点を考慮すれば石蓋土壙墓が目立つ。こうした石蓋土壙墓の床面には赤色顔料を塗布した例が多く、4割近くの墓にみられる。このようにD区では甕棺墓が残るもの、主体は豊前地域の影響を受けた石蓋土壙墓である。

注1) 高橋 錠:『草場第二道路・九州横断自動車道関係文化財発掘調査報告書(1)』大分県教育委員会:1989年

注2) 横口道也「南筑後における甕棺の編年」『福岡県北道路』瀬高町教育委員会:1985年

本田岳弘『長崎道路Ⅱ』北野町教育委員会:1998年

注3) 児玉典一『鉄製素顔頭・集団墓出土資料を中心に』『森首次郎博士古稀記念考古学論集』1982年

第2表 朝日宮ノ原遺跡D区出土土器観察表

回数	番号	遺物名	種類	形態	法面(cm)		調査	胎土	焼成	色調				参考	
					上段	下段				外巻	Hue	内巻	Hue		
6	1	1号	甕	壺	59.2	92.4	10.6	ハケ口。指サエ。 丸	ハケ口。ナデ。ヨコナ ギ。世帯	E, D, C, A	に赤い露褐色	10YR7/4	に赤い露褐色	10YR7/4	黒面
	39号	古墳	甕(上蓋)	-	(16.8)	-	-	-	-	A, C, E	に赤い露褐色	10YR7/4	に赤い露褐色	10YR7/4	側面(大きめ)外巻あり、一部赤褐色 外巻に赤褐色残存、内外巻 にスミ有り、外巻に黒面、 一部灰褐色丸
8	2	39号	古墳	壺	20.9	68.5	-	指オサエ。ハケ口。 ナデ。ヨコナギ。セザキ。ナ ギ。セザキ。スズ 付。指サエ。指介板	指オサエ。ハケ口。ナ デ。ヨコナギ。セザキ。ナ ギ。セザキ。スズ 付。指サエ。指介板	A, C, E, D	に赤い露褐色	7.5YR5/4	に赤い露褐色	7.5YR5/4	上端、下端に少々外 巻削れあり
	3	39号	古墳	甕	-	(7.6)	-	指オサエ。ナデ。ラズリ。 指介板	指オサエ。ハケ口。ナ デ。ヨコナギ。セザ キ。セザキ。スズ 付。指サエ。指介板	A, C	淡黄褐色	10YR8/3	淡黄褐色	10YR8/3	外巻にスミ有り、反転削 れ
	4	39号	古墳	甕	-	(7.2)	-	ケズリ。指オサエ。ナデ。 指介板	ケズリ。指オサエ。ナデ。 指介板	A, D, E	に赤い露褐色	10YR7/4	に赤い露褐色	10YR7/4	外巻にスミ有り、反転削 れ
	1	一號	甕生	甕	(31.4)	(9.3)	-	直孔。胎孔のため調整不 明	ヨコナギ。一部ハケ口 が残り、胎孔のため調 整不明	A, C	浅黄褐色	10YR8/3	浅黄褐色	10YR8/3	反転削元
	2	一號	甕生	甕	(27.1)	(14.3)	-	直孔。胎孔のため調整不 明	ハケ口(不規則)。ヨ コナギ	A, D, E	に赤い露褐色	10YR8/3	に赤い露褐色	10YR8/3	一部赤褐色丸
	3	一號	甕生	甕	(28.8)	(8.0)	-	ナデ	ヨコナギ。ハケ口	A, C	に赤い露褐色	10YR7/3	に赤い露褐色	10YR7/3	反転削元
	4	一號	甕生	甕	(29.0)	(6.3)	-	ナデ。ヨコナギ。直孔。 胎孔のため調整不不明	ナデ。ヨコナギ。直孔。 胎孔のため調整不 明	C, A, D	淡黄色	2.5YR3/3	淡黄色	2.5YR3/3	反転削元
	5	一號	甕生	甕	(25.6)	(11.2)	-	ヨコナギ。ナデ(不規則)。 胎孔のため調整不 明	ヨコナギ。ナデ(不規 則)。胎孔のため調 整不明	A, C	灰黃褐色	10YR6/2	浅黄褐色	10YR6/4	反転削元
	6	一號	甕生	甕	(23.6)	(4.5)	-	直孔。胎孔のため調整不 明	直孔。胎孔のため調 整不明	A, C	浅黄褐色	10YR8/3	浅黄褐色	10YR8/3	反転削元
	7	一號	甕生	甕	(22.2)	(6.7)	-	直孔。胎孔のため調整不 明	直孔。胎孔のため調 整不明	A, C	に赤い露褐色	10YR7/3	に赤い露褐色	10YR7/3	反転削元
	8	一號	甕生	甕	(24.0)	(5.6)	-	直孔。胎孔のため調整不 明	ヨコナギ。一部ハ ケ口(不規則)。	A, C, D	浅黄褐色	10YR6/4	浅黄褐色	10YR6/4	反転削元
	9	一號	甕生	甕	(27.2)	(5.7)	-	ヨコナギ。ナデ	ヨコナギ。ナデ ハケ口。ヨコナギ	A, C	に赤い露褐色	10YR5/3	に赤い露褐色	10YR5/3	一部赤褐色丸
	10	一號	甕生	甕	(30.0)	(7.8)	-	直孔。胎孔のため調整不 明	直孔。胎孔のため調 整不明	C, A	淡黄	2.5YR3/3	淡黄褐色	10YR7/4	反転削元
	11	一號	甕生	甕	(35.0)	(8.0)	-	ナデ。ヨコナギ	ヨコナギ。直孔。ナ ギ。直孔。ナデ。	A, C	淡黄色	2.5YR3/3	淡黄色	2.5YR3/3	反転削元
	12	一號	甕生	甕	(36.2)	(7.6)	-	指オサエ。指介板	指オサエ(胎孔のため調 整不明)	A, D	浅黄褐色	10YR8/3	浅黄褐色	10YR8/3	反転削元
	13	一號	甕生	甕	(26.0)	(8.0)	-	直孔。胎孔のため調整不 明。一部 ハケ口残存。直孔	直孔(胎孔のため調 整不明)。ナデ。直孔。ナ ギ。直孔。ナデ。	C, A, D	灰黃褐色	10YR5/2	浅黄褐色	10YR8/3	反転削元
	14	33号	甕生	甕	-	22.1	4.8	ナデ。指オサエ。直孔。 胎孔のため調整不 明	ナデ(不規則)。ヨコ ナギ。ナデ。胎孔。直孔。 ヨコナギ。直孔。直孔。	B, A, C, E	黑褐色	10YR3/2	褐色。黑褐色	2.5YR6/6 10YR3/2	一部反転削元。外 部に黒面あり、反転削 元。一部赤褐色丸
	15	一號	甕生	甕	-	(13.7)	(10.4)	ナデ。指オサエ	ナデ。ハケ口。直孔。 胎孔のため調整不 明	C, A	浅黄褐色	10YR6/4	浅黄褐色	10YR8/4	反転削元

第3表 朝日宮ノ原遺跡D区出土鐵器・石器観察表

回数	番号	遺物名	形態	法 面(cm)		重さ	材質	備 考
				最大幅	最小幅			
9	1	39号	刀身	6.4	3.3	2	39.5	鉄
23	1	16号	刀身	20.8	1.6	0.5	35.5	鉄
40	16	一號	石器	6.9	5.2	1.3	37.9	安山岩

半径の単位はcm。○は残存と復元部を示す。

胎孔: A角胎孔 B石英 C長石 D赤色长石 E白色长石 F黑色长石 G雲母 H砂粒 I灰色砂粒

第4章 谷ノ久保遺跡の調査

(1) 調査の内容（第42図）

発掘調査区は、遺跡の存在する山田原台地の北側縁辺部、西に向かって緩やかに傾斜する位置にある。この山田原台地は、市内の台地の中でも発達した台地の一つで、西は朝日宮ノ原遺跡の所在する宮原台地、南は小迫辻原遺跡の所在する辻原台地に続いている。山田原台地上での遺跡の分布は台地東側に集中する傾向にあり、過去には後追跡や羽野横穴墓群などの遺跡発掘調査が実施されている。

今回の調査区は南北方向に約26m、東西方向に約25mで、調査面積は471m²である。調査区は最も高い場所で標高約128.5m、最も低い場所で約126mの比高差2.5mを測る、台地端部の傾斜面にある。

発掘調査で発見された遺構は、建物1棟、土坑7基、ピット数基である。こうした遺構は、調査区西側の標高が高い場所に残っている。調査の段階では3・5号も土坑として遺構番号を付していたが、3号は近世期遺構の陶磁器片が出土し、5号は樹木の搅乱坑と考えられるため、遺構から除外した。しかしながら、報告にあたっては調査中の遺構番号を踏襲することとし、3・5号の遺構番号は欠番としている。



第42図 谷ノ久保遺跡調査区位置図 (1/4,000)

(2) 遺構と遺物（第43図）

建物（第44図、図版11）

1号建物は、調査区の西側で検出した。建物規模は1間×1間で、柱間寸法は心心距離で東西軸が170～200cm、南北軸が210～220cmを測る。柱痕跡は確認できず、深さは15～34cmを測る。建物の中央部に円形に近い土坑が伴うと考えられる。土坑は長軸が36cm、短軸が32cm、深さ62cmを測る。床面積は3.9m²である。遺物は出土していない。

土坑（第44図、図版11）

1・2・4・6～8号が該当する。

1号土坑 調査区の西隅で検出した。平面形は長楕円形プランをなし、長軸が132cm、短軸が98cm、深さ106cmを測る。遺物は掲載実測図以外に、縄文土器の破片が出土している。

出土遺物（第45図1～5）

1は浅鉢の口縁部。脣部は屈曲し、口縁は短く外反する。2は深鉢の口縁部。端部は丸みを帯び、ほぼ直立する。3は深鉢の脣部であろう。4・5は浅鉢の底部である。いずれも平底をなす。

2号土坑 1号土坑のすぐ東側で検出した。平面形は長楕円形のプランをなし、長軸が128cm、短軸が92cm、

深さ 20 cm を測る。遺物は、掲載の実測図以外にも、縄文土器の小破片が出土している。

出土遺物（第 45 図 6～8）

6 は浅鉢の脇部。屈曲し、大きく外反する。7・8 は深鉢の底部。平底をなすものと考えられる。

4 号土坑 1 号建物の東側で検出した。平面形は円形に近いプランをなし、長軸が 180 cm、短軸が 150 cm、深さ 38 cm を測る。土坑中央に小ピットが認められる。遺物は掲載実測図以外に、縄文土器の破片が出土している。

出土遺物（第 45 図 9）

9 は浅鉢の口縁部。脇部は屈曲し、口縁は近く外反する。

6 号土坑 調査区のほぼ中央で検出した。平面形は円形プランをなし、径 100 cm 前後、深さ 9 cm を測る。削平が著しい。遺物は出土していない。

7 号土坑 6 号土坑に近接して検出した。平面形は円形に近いプランをなし、径 150 cm 前後、深さ 100 cm を測る。遺物は、縄文土器の小破片が出土しているが、実測図は掲載していない。

8 号土坑 4 号土坑のすぐ北側で検出した。平面形は不整形プランをなし、二段掘りである。長軸が 200 cm、短軸が 135 cm、深さ 55 cm を測る。遺物は、縄文土器の小破片が出土しているが、実測図は掲載していない。

9 号土坑 8 号土坑のすぐ東側で検出した。平面形は不整形プランをなし。一部攢乱を受けている。長軸が 340 cm、短軸が 158 cm、深さ 80 cm を測る。遺物は掲載実測図以外に、縄文土器の破片が多く出土しているが、実測図は掲載していない。

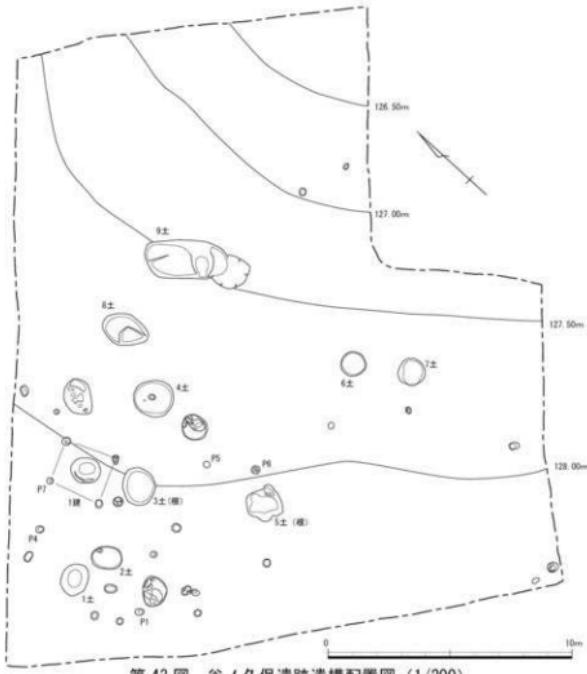
出土遺物（第 45 図 10～13）

10 は浅鉢の口縁部。やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は直立する。11 は深鉢の口縁部で、ほぼ垂直に立ち上がる。12 は鉢であろうか。口縁部は外反気味に立ち上がる。13 は平底の底部である。

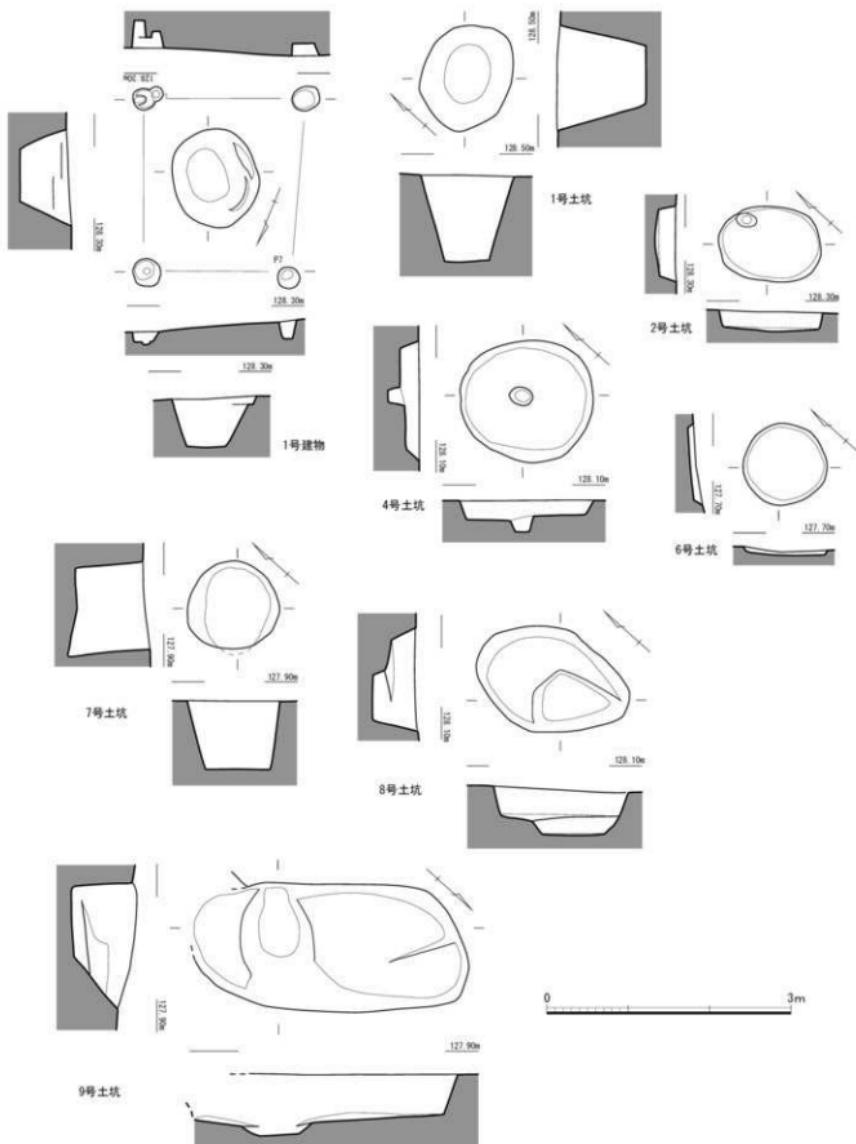
その他の遺物

（第 45 図 14～16）

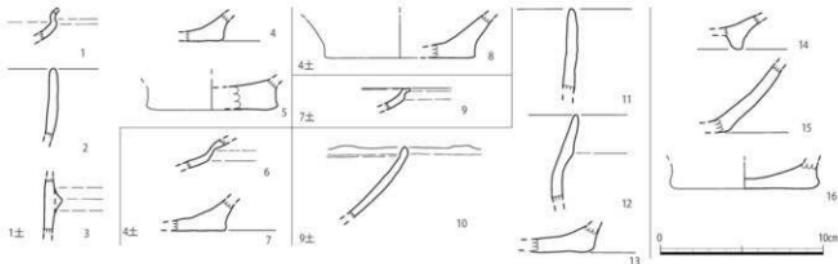
14 は浅鉢の底部。ピット 5 からの出土。15 は鉢の底部附近。ピット 6 からの出土。16 は深鉢の底部。平底である。一括品。このほか、縄文土器の小破片が出土しているが、実測図は掲載していない。



第 43 図 谷ノ久保遺跡遺構配置図 (1/200)



第44図 建物・土坑実測図 (1/60)



第45図 出土遺物実測図 (1/3)

(3) 小結

この遺跡の時期については、土器破片が多いために年代の特定が難しいが、第45図1や9などの浅鉢の特徴から縄文晩期に比定されよう。このほかの遺物も縄文土器片が大半を占めていることから、ほぼこの時期の遺跡、遺構と考えてもよさそうである。従って、報告した7基の土坑については、縄文時代晩期の所産としておきたい。なお、1号建物については、年代を特定できる遺物が出土していないので、はっきりした時期比定は難しい。

第4表 谷ノ久保遺跡出土遺物観察表

回版	番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調			備考		
					口径	器高	底径			内面	Hue	外面	Hue		
45	1	1土坑	縄文	浅鉢				ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	
	2	1土坑	縄文	深鉢				ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	
	3	1土坑	縄文	深鉢?				ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR5/3	
	4	1土坑	縄文	浅鉢				ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	
	5	1土坑	縄文	浅鉢	(8.0)			ナデ	ナデ	C, A	にぶい相	5YR6/4	にぶい相	5YR6/4	
	6	4土坑	縄文	浅鉢				ナデ	ナデ	C, A	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	
	7	4土坑	縄文	深鉢				ナデ	ナデ	C, A	にぶい相	5YR6/4	にぶい相	5YR6/4	
	8	4土坑	縄文	深鉢	(9.2)			ナデ	ナデ	C, A	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	
	9	7土坑	縄文	浅鉢				不明	黒め不明	C	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	
	10	7土坑	縄文	深鉢				ナデ	ナデ	C, A	にぶい相	7.5YR5/3	にぶい相	7.5YR5/3	
	11	9土坑	縄文	深鉢				ナデ	ナデ?	C, A	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR5/3	
	12	9土坑	縄文	鉢?				ナデ?	ナデ?	C, A	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR5/3	
	13	9土坑	縄文	-				ナデ	ナデ	C	不良	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR5/3
	14	P-5	縄文	浅鉢				ナデ	ナデ	C, A	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR5/3	
	15	P-6	縄文	鉢				ナデ	ナデ	C, A	にぶい相	2.5YR4/4	にぶい相	2.5YR4/4	
	16	1塔	縄文	深鉢		9.0		ナデ	ナデ	C, A	にぶい相	7.5YR5/3	にぶい相	7.5YR5/3	

※法量の単位はcm。○は残存と復元箇所を示す。

胎土: A角閃石 B石英 C長石 D赤色粘土 E白色粘土 F黑色粘土 G青銅 H銀粘土 I灰色粘土

第5章 朝日宮ノ原遺跡E区の調査

(1) 調査の内容 (第46図)

朝日宮ノ原遺跡E区は、宮原台地の南側縁辺部にあたり、徐々に南側に向かって傾斜している。過去におけるこの遺跡の調査は、台地南側の昭和28年調査区やA区、中央部のB・C区、北側のD区で行われており、今回の調査区は昭和28年度調査区付近に位置する。

調査は豪栢墓の存在が確認された箇所を中心とし、周辺の墳墓群の存在を確認するトレンチを設定して実施し、墳墓が確認された箇所に関しては範囲を拡張した。調査対象地は墳墓群にあわせて拡張したため不整形で、面積は35.6 m²を測る。地形面はほぼ平坦で、遺構検出面は茶褐色のローム質粘土で、調査は人力にて表土除去を行った。遺構の掘り下げを行った後に人骨の取上げを実施し、作業が完了して調査区を埋め戻した。

調査において検出された遺構は豪栢墓1基、石棺墓1基、木棺墓2基、土坑墓2基、土坑2基で、現況の耕作土直下が地山で、遺構埋土は暗褐色土であった。遺構の残存状況などから、畑地造成により数10センチ程度削平されているものと想定される。

以下、検出した遺構と遺物についてまとめる。なお、方位角は北0°、東90°、南180°、西270°で表現する。

(2) 遺構と遺物 (第47図)

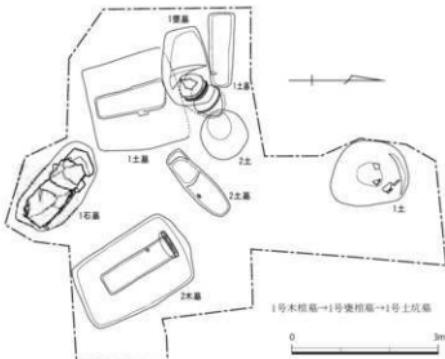
1号豪栢墓 (第48・49図、図版12・13)

調査地中央より西側に位置し、1号土坑墓に切られ、1号木棺墓を切っている。上面は畑の耕作により削平を受けており、上蓋の一部がトラクターによって破損していた。残存状況は比較的良好で、合口豪栢の接合部には目貼り粘土が残り、下蓋に崩落する形で人骨が確認された。墓壙は不整方形を呈し、豪栢の挿入主軸は40°で、確認面での規模は長軸160cm、短軸103cm、深さ69cmを測る。埋置角度は42°、主軸は222°を呈していた。

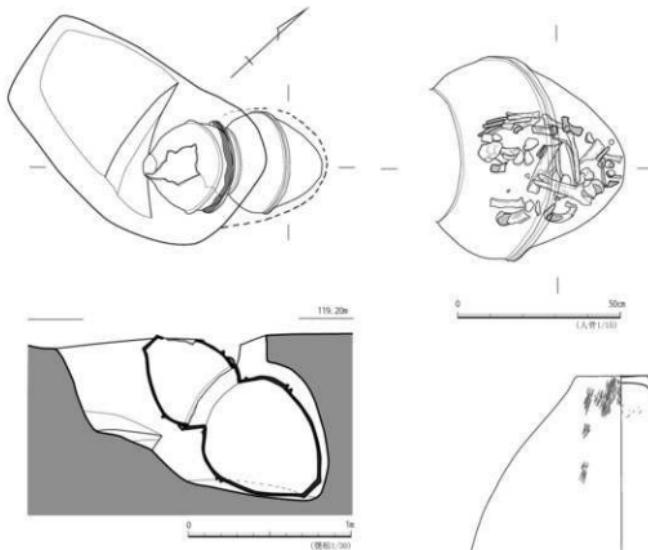
人骨の取上げを行った田中教授によれば、「下蓋に骨が崩落した状態でその後の土砂の流入によって乱れており、足根骨・指骨が底部付近にあり、頭骨片が口縁側に見られることからみて、足から棺に入れたと考えられるものの、それ以上の埋葬姿勢は不



第46図 朝日宮ノ原遺跡E区調査区配置図 (1/5,000)



第47図 E区全体図 (1/100)



第48図 1号壺棺墓実測図 (1/30)

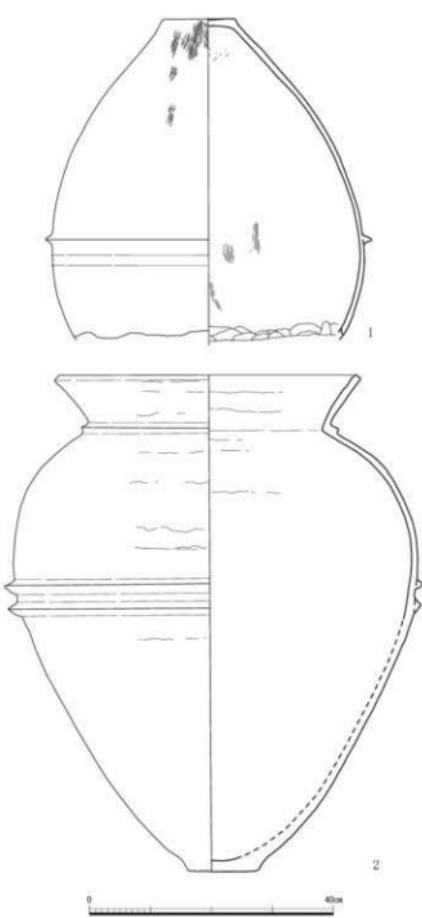
明である。」との所見を頂いている。

第49図1は上褒である。口縁部は下側の口径より小さく、内側にはめ込まれるように打ち欠かれていた。中型の大きさの褒を使用したものと思われる。胴部には断面三角形の突帯が巡り、胴部は若干張り出し、底部は平底を呈する。内外共に丁寧に調整をナデ消しており、胴部内面の一部及び外面の底部付近に縱方向のハケ目が残存している。底部内面には指頭圧痕が残る。

第49図2は下褒である。口縁部が直線状に長く外に開くタイプの褒である。口縁部はくの字の跳ね上げ状で直線的に伸び、頸部に断面三角形の突帯が1条巡り、肩部が張り出し、胴部下半に断面三角形状の突帯が2条巡る。底部は平底を呈する。内外共に丁寧にナデ仕上げられており、内外共に粘土帶を工具状のナデで平滑にした痕跡が残存する。豊前系の褒で、同様の器種は市内では宇土遺跡3号壺棺墓、大肥遺跡B-1区5号壺棺墓などで見られ、中期末葉と考えられる。

1号石棺墓（第50図、図版12）

調査地南端に位置する。上面は畠の削平により掘



第49図 1号壺棺実測図 (1/8)

削を受けており、石蓋が露出していた状態であった。残存状態は比較的良好で石蓋等の欠落等は見られず、石蓋東側面には目貼り粘土の痕跡が確認された。蓋石、石棺材はいずれも安山岩の偏平石で、墓壙は方形で石蓋の掘方をそのまま掘り下げ、石棺を構築していた。埋葬施設の主軸は122°で、確認面での規模は墓壙が長軸208cm、短軸105cm、深さ44cmを測る。埋葬施設の規模は長軸160cm、短軸30cm、深さ35cmであった。石棺は両側壁に板石を3枚程度並べて構築し、両小口で挟み込んでいる。床面には板石が敷き詰められていた。頭位箇所には歯牙の一部が床面よりやや浮いた状態で残存していたものの、磨耗が著しく詳細は不明であった。

1号木棺墓（第51図、図版13）

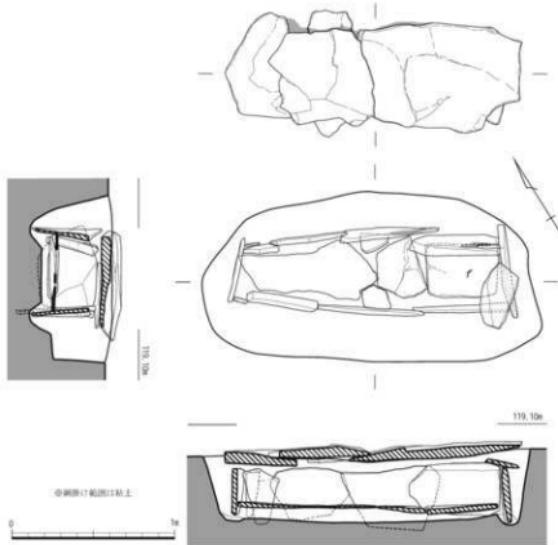
調査区西側に位置し、1号木棺墓に切られている。上面は畑の耕作により削平を受けていたと考えられる。墓壙は暗茶褐色土と黄褐色土ブロックの埋土で裏込めされ、埋葬施設は暗褐色土の流入土が見られた。埋葬施設は北側の幅がやや広く頭位と想定される。墓壙は方形を呈し、確認面での規模は長軸189cm + α 、短軸195cm、深さ28cmを測る。埋葬施設は主軸345°、長軸147cm、短軸60cm、深さ32cmを測る。

2号木棺墓（第52図、図版13）

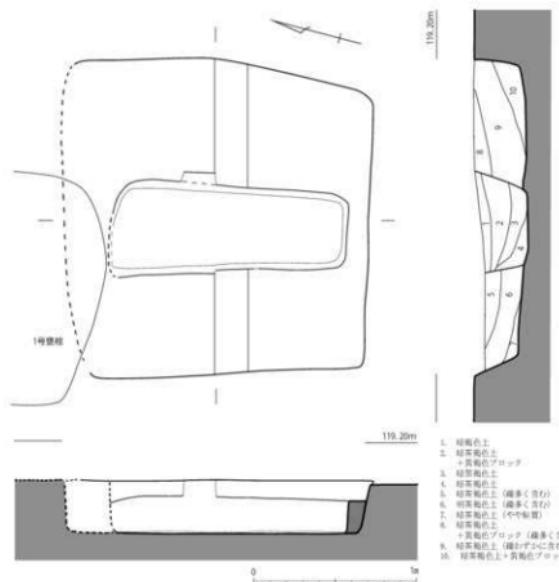
調査区東端に位置する。上面は畑の耕作により削平を受けていたと考えられる。墓壙は暗褐色粘土と黄褐色ブロックが混在する土で裏込めされる。埋葬施設は黒褐色ブロックの流入土が見られ、南東側木口部には板石が立てられていた。この板石の立っていた方が頭位方向と考えられる。墓壙は方形を呈し、確認面での規模は長軸254cm、短軸159cm、深さ22cmを測り、埋葬施設は主軸が55°で、長軸155cm、短軸19cm、深さ21cmを測る。

1号土坑墓（第53図、図版13）

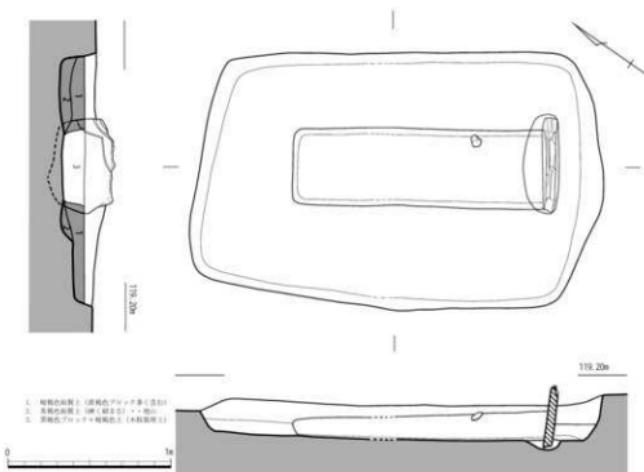
調査区西側に位置し、1号木棺墓を切っている。東側の幅が広がっていることから頭位方向と考えられる。墓壙は長方形を呈し、主軸は88°で、長軸151cm、短軸54cm、深さ23cmを測る。



第50図 1号石棺墓実測図 (1/30)



第51図 1号木棺墓実測図 (1/30)



第52図 2号木棺墓実測図 (1/30)

2号土坑墓（第54図、図版13）

調査区中央に位置しており、南西側が幅が広く、北東側の足元が掘り込まれていることから、南西側頭位と想定される。筑後川流域に見られる足元掘り込み式の土壙墓の可能性が想定される。墓壙は長方形を呈し、主軸は136°で、長軸107cm、短軸54cm、深さ28cmを測る。

1号土坑（第54図、図版13）

調査区北側に位置する土坑で、不整形を呈している。階段状のテラスを有し、内部に土器片や石などがやや浮いた状態で出土した。葬棺墓の抜き跡の可能性が想定される。確認面での規模は長軸160cm、短軸150cm、深さ60cmを測る。

出土遺物（第57図）

1は弥生土器甕の口縁部である。口縁部がくの字に外反し端部を跳ね上げる。2は弥生土器甕の口縁部である。くの字に外反し、頸部や下半に三角突帯が1条巡る。3は甕の口縁部である。口縁下部に三角突帯が1条巡っている。内外共に丹塗りが施されるものの殆どがハゲ落ちている。

2号土坑（第56図、図版13）

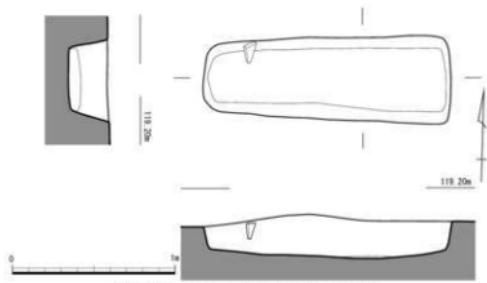
調査区中央に位置している土坑で、円形を呈している。確認面での規模は径約100cm、深さ45cmを測る。

出土遺物（第57図）

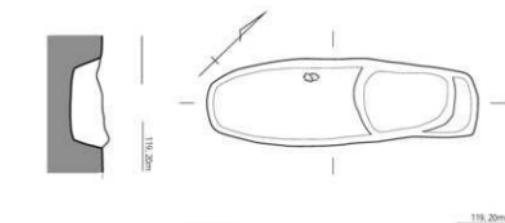
4は弥生土器甕の底部である。外面はハケ目調整であるが摩滅のため調整は不明瞭である。

その他の出土遺物（第56図）

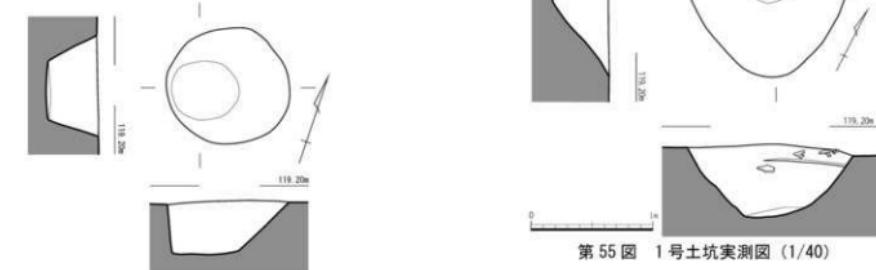
1は1号葬棺墓より出土した弥生土器甕の底部である。内面底部には指頭圧痕が残る。2～5は表土一括出土遺物である。2は弥生土器甕の口縁部である。口縁はくの字状に外反し、頸部下部に頂部に刻みを施す断面三角形の突帯が1条巡る。3は弥生土器甕の口縁部で、くの字に外反して跳ね上げる。頸部や下半に断面三角形の突帯が1条巡る。4は弥生土器甕の底部で外面にハケ目が残存する。5は石礫である。黒曜石製で切先及び基部が欠損している。



第53図 1号土坑墓実測図 (1/30)

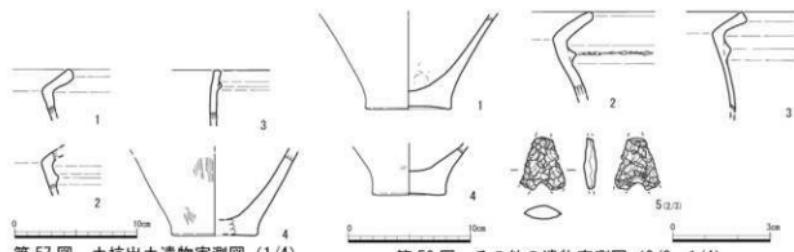


第54図 2号土坑墓実測図 (1/30)



第55図 1号土坑実測図 (1/40)

第56図 2号土坑実測図 (1/40)



第57図 土坑出土遺物実測図 (1/4)

第58図 その他の遺物実測図 (2/3, 1/4)

(3) 龫棺出土人骨について

舟橋京子＊・谷澤アリ＊＊・米元史織＊＊・高椋浩史＊＊・李ハヤン＊＊・田中良之＊＊＊

*九州大学総合研究博物館

＊＊九州大学大学院比較社会文化学府

＊＊＊九州大学大学院比較社会文化研究院

1. はじめに

大分県日田市朝日宮ノ原遺跡E区の弥生時代の齎棺墓から人骨が出土し、九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座へ搬送され、同講座において、整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化学府考古人類資料室に保管されている。

2. 人骨出土状態

人骨は合わせ口式の齎棺墓の下腹下半部から出土している。底部側からは下肢骨片を含む複数の骨片が出土しており、胸部側からは頭蓋骨・下顎骨などが出土している。以上の出土状況から、本個体の詳細な埋葬姿勢は不明であるものの、脚部から下腹に挿入されていたと推定される。

3. 人骨所見

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くなく、細かい部位同定や観察が困難である。頭蓋骨は部位同定困難な破片と下顎骨が遺存している。下顎は右側のみ歯槽部の観察が可能であり、側切歯・右第一小臼歯の歯根のみが遺存しており残りの歯槽は閉鎖している。この他にも部位同定困難な歯冠片が数点遺存している。

軀幹骨は軸椎・肋骨片が遺存している。

上肢骨は右橈骨・尺骨片・右月状骨・右大菱形骨・右第一基節骨・左有頭骨・指骨片が遺存している。

下肢骨は左寛骨片・左脛骨・右大腿骨遠位端片・右脛骨近位端片・左右距骨片・左踵骨・左中間楔状骨・左右第一中足骨・左右第二中足骨が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、遺存している下顎歯槽窩の臼歯部がほとんど閉鎖していることから老年後半以上と推定される。性別は、判別可能な部位が遺存していないため不明である。

4. まとめ

以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は保存状態があまり良くなく、計測に耐える人骨はなく形質的比較を行える個体は得られなかった。

最後に本報告にあたり、日田市教育委員会各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。

(4) 小結

朝日宮ノ原遺跡E区の調査結果について以下にまとめる。

墓域の形成については、切り合い関係から1号木棺墓⇒1号喪棺墓⇒1号土塙墓の順番が確認され、喪棺墓の時期は概ね弥生中期末葉と考えられる。このことから、墓域の継続性を考慮すると、木棺墓は中期中頃～後半頃と推測される。日田地域のそのほかの墳墓群でも木棺墓⇒喪棺墓⇒土塙墓・石棺墓の順で墓域が形成される傾向が見て取れることから、土塙墓・石棺墓は後期以降の築造と考えておきたい。このE区周辺では昭和28年頃に高三瀬式の後期前半頃と想定される外部施設を有する喪棺墓が発掘されており、副葬遺物として青色ガラス小玉相当数が出土したとされている。さらに、この喪棺墓の周囲には石棺墓が発見されているなど、この一帯周辺に弥生中期中頃～後期前半の墳墓群が多数作られていた可能性が想定される。

1号喪棺墓からは人骨が出土しており、九州大学の所見では熟年後半以降と推定されている。土塙墓・石棺墓の埋葬施設の規模から推測しても、これらの墓群が成人墓であった可能性が高いと予測される。

また、特徴的なのは、喪棺墓に採用されている土器が豊前系であり、さらに土坑墓には筑後川流域で見られる足元掘り込み式が見られることなどである。豊前・筑後に挟まれた日田地域の特色を顕著に現しているといえ、D区の成果と朝日宮ノ原遺跡での墓域の形成過程を考える上で貴重な資料を提供しているといえよう。

第5表 朝日宮ノ原遺跡E区出土土器観察表

回数	番号	出土遺構	埋深	法華(cm)			調査		出土	焼成	色調				備考	
				上部	中間	底部	内面	外面			内面	外側	外側	外側		
49	1	1 墓 生	腰相	-	52.7	12.9	ナデ、ぬけサエ、一部 ハケ目欠存	ナデ、コヨナデ、ハケ 目、麻付穴埋	C, E, G	良	に高い黄褐色 に高い黄褐色	10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	1.3mm割れ欠け、外側に 黒斑あり、反転済み、一 部凹成
	2	1 墓 生	腰相	48.6	81.5	11.6	(工具) ナデ	ナデ、ヨコナデ、突起 黒斑	D, E, A, C	良	に高い黄褐色	10YR7/4	に高い黄褐色	10YR7/4	10YR7/4	黒斑、接合縫
57	1	1 士 生	腰				風化のため不明	風化のため不明	B, A, D	良	に高い黄褐色	10YR7/4	に高い黄褐色	10YR7/4	10YR7/4	
	2	1 士 生	腰				不明	不明	B, C, D, A	良	浅黄褐色	10YR8/4	浅黄褐色	10YR8/4	10YR8/4	
	3	1 士 生	腰				内壁りはほとんど剥離して いる	内壁りはほとんど剥離して いる	B, C	良	に高い黄褐色 丹：赤	10YR7/4	に高い黄褐色 丹：赤	10YR7/4	10YR5/6	
	4	2 土	生	腰	-	(6.7)	(6.6)	ぬけサエ、ナデ、腰相 のため調理不透明	ハケ目、腰相のため調 理不透明	A, D, E	良	に高い黄褐色	10YR7/3	に高い褐色	7.5YR7/3	反転済元
58	1	1 墓 生	腰	-	(7.5)	7.0	ナデ、ぬけサエ、 ナデヨコナデ、ナデ 縫	ナデヨコナデのため不明 縫	A, C, F	良	に高い黄褐色	10YR7/4	に高い黄褐色	10YR7/4	10YR7/4	一調反転済元
	2	1 旗 生	腰				ナデ	ナデ	B, C, A, H	良	に高い黄褐色	10YR7/4	に高い黄褐色	10YR7/4	10YR7/4	
	3	1 旗 生	腰				風化のため不明	風化のため不明	B, C, A	良	浅黄褐色	10YR8/4	浅黄褐色	10YR8/4	10YR8/4	
	4	1 旗 生	腰	-	(3.9)	6.0	腰相、ぬけサエ、腰 相のため不明	ハケ目、腰相のため不明	A, C, D	良	浅黄褐色	10YR8/4	浅黄褐色	10YR8/4	10YR8/4	2段反転済元

*法華の単位はcm。○は既存と復元部を示す。

出土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黑色粒子 G園石 H砂粒子 I羽状岩質

第6表 朝日宮ノ原遺跡E区出土土器観察表

回数	番号	遺構名	埋深	法華(cm)			素さ	材質	備考
				最大	最小	平均			
58	5	1 旗	石頭	1.6	1.3	0.4	0.73	黒曜石	

第6章 総括

今回報告した各遺跡の調査成果などを、以下にまとめる。

まず、朝日宮ノ原遺跡D地区については、

1. 妻棺墓1基、壺棺墓1基、箱式石棺墓4基、土壙墓24基の計30基の墳墓で構成される墓地であることが判明した。こうした墳墓のはかに、溝2条、土壙5基も確認されており、溝2条については方形周溝墓の溝の可能性もある。
2. 墳墓群のうち、壺棺墓には袋状鉄斧、石蓋土壙墓2基には素環頭刀子と鉄製品が副葬されていた。このうち、素環頭刀子は環頭部が円形ではなく不整形に作られており、遠賀川流域からの影響とみられる。
3. 墳墓群の年代は、妻棺などから、弥生時代後期後半から終末以後、古墳時代前期に営まれたと考えられる。
4. また、墳墓群は、その配置から大きく2つのA群とB群に区分でき、A群は墓の主軸方向から南北軸の墓群と東西軸の墓群に分けられる。
5. 墳墓群は、A群の南北軸である壺棺墓+箱式石棺墓+土壙墓、次にA群の主軸が東西方向を示す箱式石棺墓+土壙墓、さらにB群の壺棺墓+箱式石棺墓+土壙墓の順に営まれたと想定される。
6. こうした流れから、壺棺墓が残りながらも、主体は豊前地域の影響を受けた石蓋土壙墓である。

次に、谷ノ久保遺跡については、

1. 発掘調査で発見された遺構は、建物1棟、土坑7基、ビット数基である。こうした遺構は、調査区の最も高い場所に集中してみられた。
2. 建物については、年代を特定できる遺物が出土していないので、はっきりした時期比定は出来なかったが、7基の土坑については、縄文時代晩期の遺構と推定できた。
3. 今回の調査は、山田原台地北側にも遺跡が存在することを確認することができた。

次に、朝日宮ノ原遺跡E地区については、

1. 妻棺墓1基、木棺墓2基、土壙墓2基、土坑2基で、墳墓群を中心としている。
2. 妻棺墓は口縁部の形状などから、豊前地域からの影響を受けたものと考えられた。
3. 妻棺墓からは人骨が出土しており、性別は不明であるが、年齢は熟年後半以降と推測され、妻棺は成人棺と判断される。
4. 墳墓群は、妻棺墓の年代の中期末葉を中心とする時期と推測され、中期後半から後期にかけてと考えられる。
5. 切りあい関係などから、当該墓地の展開は木棺墓→妻棺墓→土壙墓・石棺墓の順番であったと推測される。
6. 昭和28年ごろにE区周辺で後期前半の妻棺墓が発見されたとされており、E区周辺である宮原台地南側縁辺には中期後半から後期前半にかけての墳墓群が広がっていたものと推測される。このことから、後期後半から古墳時代前期頃の墳墓群が営まれるD区の台地北側縁辺と時期の異なる墓域が2群に分かれて営まれていたものと考えられる。したがって、過去の調査成果（第2・3図）なども考慮すると、台地中央部に前期末～後期の集落が営まれ、台地縁辺部に時期の異なる墳墓群が広がっていたものと予測される。



① 調査区空撮（1）



② 調査区空撮（2）



③ 調査区空撮（3）



④ 調査区空撮（4）



⑤ 調査区空撮（5）



⑥ 調査区の遺構検出状況（西から）



⑦ 調査区遺構検出状況（南から）



⑧ 調査区遺構検出状況（北から）

写真図版 2



① 6～9号墓検出状況（西から）



② 6～9号墓（西から）



③ 19～22号墓（東から）



④ 発掘状況（南から）



⑤ 発掘状況（西から）



⑥ 発掘状況（東から）



⑦ 発掘調査風景



⑧ 調査参加者



① 1号墓



② 1号墓



③ 1号墓



④ 1号墓発掘写真



⑤ 39号墓



⑥ 39号墓

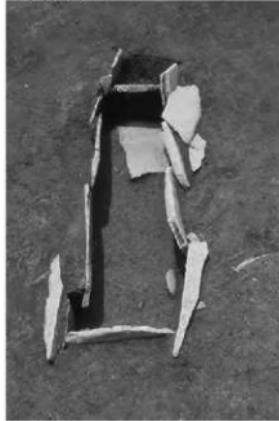


⑦ 39号墓



⑧ 39号墓副葬品

写真図版 4



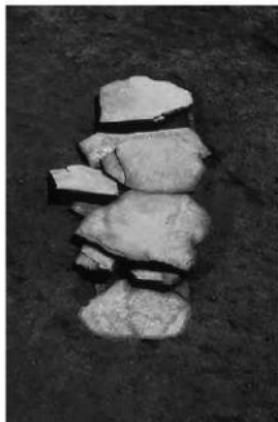
① 3号墓



② 23号墓



③ 26号墓



④ 36号墓



⑤ 36号墓



⑥ 2号墓



① 6号墓



② 6号墓



③ 7号墓



④ 9号墓

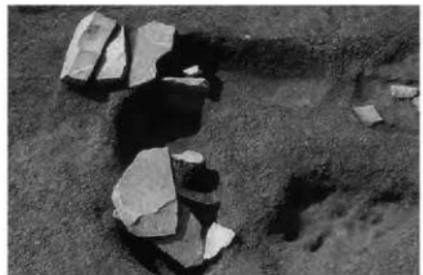


⑤ 10号墓



⑥ 11号墓

写真図版 6



① 12・13号墓



② 14号墓



③ 14号墓



④ 15号墓



⑤ 16号墓



⑥ 16号墓



① 16号墓副葬品



② 19号墓



③ 20号墓



④ 21号墓



⑤ 25号墓



⑥ 27号墓



① 37・38号墓



② 4号墓



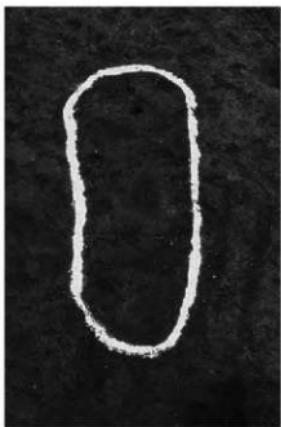
③ 37・38号墓



④ 4号墓



⑤ 8号墓



⑥ 17号墓



① 22号墓



② 1号溝



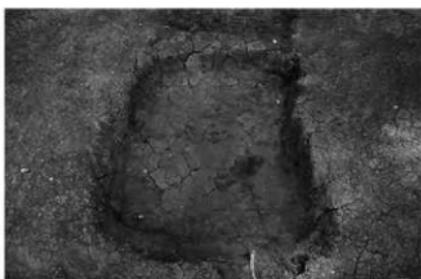
③ 2号溝



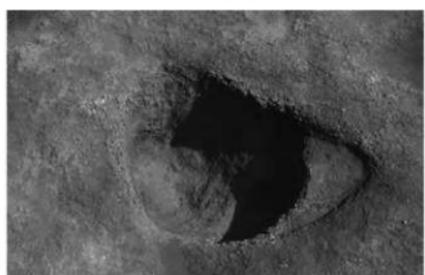
④ 18号土坑



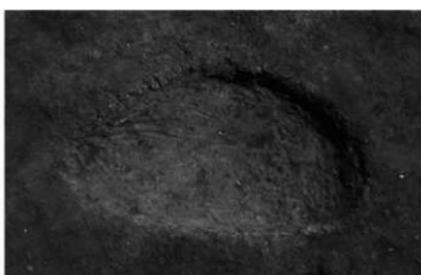
⑤ 24号土坑



⑥ 29号土坑



⑦ 30号土坑



⑧ 31号土坑

写真図版 10



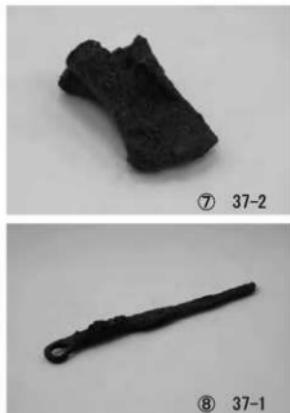
① 6-1



③ 8-1



④ 8-4

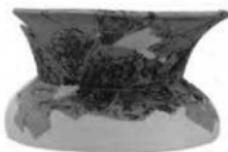


⑦ 37-2

⑧ 37-1



② 6-2



⑤ 39-5



⑥ 39-15

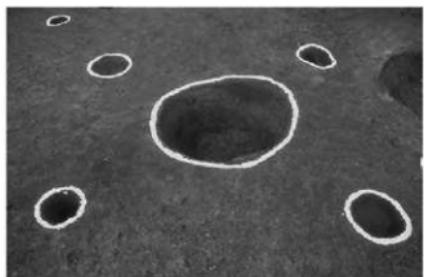
- ① 1号漆棺
- ② 39号漆棺（下漆）
- ③ 39号漆棺（上漆）
- ④ 39号底部の漆
- ⑤ 壺（一括品）
- ⑥ 袋状鉄斧（39号墓）
- ⑦ 素環頭刀子（16号墓）



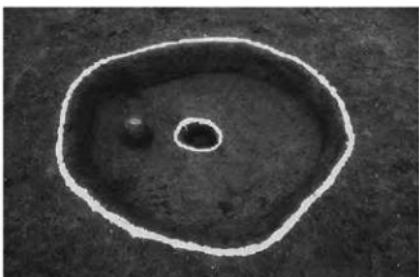
① 調査区全景



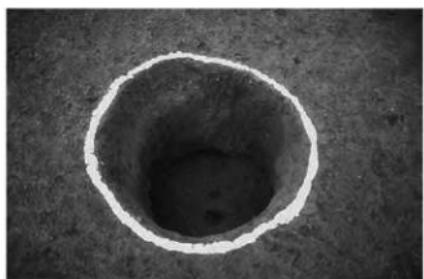
② 調査区全景（西から）



③ 1号建物（西から）



④ 4号土坑（南から）



⑤ 7号土坑（南から）



⑥ 8号土坑（東から）



⑦ 9号土坑（北から）



⑧ 調査風景

写真図版 12



①調査前風景（北から）



③1号疊棺墓人骨



⑤1号石棺墓完掘状況（北西から）



④1号石棺墓蓋石検出状況（南東から）



⑦1号木棺墓検出状況（南から）

⑧1号木棺墓完掘状況（南から）



① 1号木棺墓検出状況（北から）



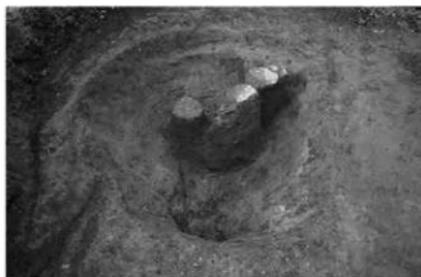
② 1号木棺墓完掘状況（北から）



③ 1号土坑墓完掘状況（西から）



④ 2号木棺墓完掘状況（南西から）



⑤ 1号土坑完掘状況（南から）



⑥ 47-1



⑦ 47-2

※写真に付している番号は挿図番号に一致する。

⑥ 1号漆棺墓上蓋

⑦ 1号漆棺墓下蓋

報告書抄録

ふりがな	あきひみやのはるいせき・たのくぼいせき
書名	朝日宮ノ原遺跡・谷ノ久保遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	市内遺跡発掘調査報告書・日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	10・第104集
編著者名	土居和幸・渡邉隆行・舟橋京子・谷澤亜里・木元史織・高柳浩史・季ハヤン・田中良之
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2012年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
朝日宮ノ原遺跡D区	大分県日田市大字小追山田119	44204-6	204025	33° 20' 44"	130° 55' 5"	19880627 ~19880811	688 m ²	畠地造成
谷ノ久保遺跡	大分県日田市大字三和字坂ノ辻	44204-6	204021	33° 21' 10"	130° 56' 1"	19950718 ~19980729	471 m ²	福祉施設建設
朝日宮ノ原遺跡E区	大分県日田市大字小追字十石山ノ上 1510-2	44204-6	204025	33° 20' 36"	130° 55' 7"	20010208 ~20010216	35.6 m ²	畠地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝日宮ノ原遺跡D区	墳墓	弥生	表棺墓、石棺墓、土坑墓	表棺、袋状鉄斧、素環頭刀子、 弥生土器、石匙	
谷ノ久保遺跡	集落	縄文	建物、土坑	縄文土器	
朝日宮ノ原遺跡E区	墳墓	弥生	表棺墓、木棺墓、石棺墓	表棺、弥生土器	人骨出土

要約	<p>朝日宮ノ原遺跡は日田盆地北部の通称宮原台地上に広がる弥生集落遺跡で、これまで5次の調査が行われている。このうちD区は昭和60年度に畠地造成に伴う緊急調査として実施し、弥生時代後期後半から古墳時代前期頃の墳墓群が確認されている。墳墓は表棺墓1基、直棺墓1基、箱式石棺墓4基、土壙墓24基の計30基の墳墓で構成され、大きいく2群に分けられる。なかでも土壙墓と直棺墓には鉄器が副葬されていた。</p> <p>E区は平成13年度に畠地造成に伴う緊急調査として実施し、弥生時代中期後半から後期頃の墳墓群が確認されている。墳墓は表棺墓1基、石棺墓1基、木棺墓2基、土壙墓2基の計6基で構成され、木棺墓→表棺墓→土壙墓・石棺墓の順で作られる。なかでも表棺墓からは人骨が検出され、熟年後半の被葬者が推定されている。</p> <p>谷ノ久保遺跡は日田盆地北部の通称山田原台地北側縁辺部に位置しており、平成6年度に福祉施設建設に伴う緊急調査として実施し、縄文時代晚期の土坑7基、建物1棟が発見されている。台地北側縁辺に縄文時代遺跡が広がっている可能性が示唆されている。</p>
----	---

朝日宮ノ原遺跡
谷ノ久保遺跡

市内遺跡発掘調査報告 10
日田市埋蔵文化財調査報告書第 104 集
2012 年 3 月 31 日

編集 日田市教育庁 文化財保護課
877-0077 大分県日田市南友田町 516-1
発行 日田市教育委員会
877-8601 大分県日田市田島 2-6-1
印刷 株式会社インデバイス
877-0076 大分県日田市大字庄手龜川町 848 - 1

